

西都市・埋蔵文化財発掘調査報告書

第 12 集

諏 訪 遺 跡

県立東高等学校聖蹟会館建設事業
に伴う調査報告

1990・7

宮崎県西都市教育委員会

西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第12集正誤表

訂正箇所	誤	正
26頁図説明	溝状遺構3号実測図	溝状遺構2号実測図
29頁図説明	溝状遺構6号	溝状遺構7号

序

西都市は、豊かな自然と歴史的な景観が多く残され、さらに平野部に所在する丘陵地は、大小の別なく古代遺跡が包蔵されると周知されています。

ここに刊行しました、西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第12集は、平成元年度に、宮崎県立妻高等学校聖陵会の聖陵会館建設に伴って実施した発掘調査の報告であります。

調査の結果等につきましては、本書に記載したとおりですが、発掘調査に深いご理解をいただきました、聖陵会の河野通雄会長をはじめとします関係者に対し、深甚の謝意を表します。

本書が、今後の古代文化研究に資するとともに、埋蔵文化財への理解がさらに深まり、また社会教育・学校教育の面で広く活用されることを期待いたします。

最後になりましたが、発掘調査から資料整理にいたるまでの関係者、特に終始調査に積極的なご協力を賜った、片岡信雄校長並びに旭吉法耿氏に対しまして、心から厚く御礼を申し上げます。

平成2年7月20日

西都市教育委員会

教育長 平野 平

例　　言

1. 本書は、県立妻高等学校聖陵会館建設に伴い、聖陵会の調査委託を受けて西都市教育委員会が実施した調査遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、平成元年10月2日から同年10月27日までの間に実施した。
3. 調査関係者は次のとおりである。

県立妻高等学校長 片岡信雄

妻高等学校聖陵会

会長 河野通雄

副会長 旭吉法耿(調査担当)

事務局長 斎藤芳夫(会計)

建設委員長 杉田能

西都市教育委員会

教育長 平野平

社会教育課長 清郁男

文化財係長 黒川忠男

調査員

西都原古墳研究所長 日高正晴

同上嘱託 緒方吉信

社会教育課文化財係 薩方政幾

調査作業員

池田邦博・河野達也・田中安市・松井寛・新城静夫・本部文徳・北島利雄・

緒方ステ子・久保田要子・黒木トシ子

4. 本書に使用した図の作成並びに本文の執筆及び編集は、緒方吉信が行った。
5. 本書の遺物実測は緒方吉信が行ない、遺物の分類は日高正晴が行った。
6. 本書に使用した遺構の一部に略記号を付した、次のとおりである。
S…方形状土坑、R…円形土坑、D…溝状遺構、P…柱穴(ピット)
7. 本書に示した方位はすべて磁北である。
8. 本調査によって出土した遺物及び調査記録類は、本報告終了後に西都市歴史民俗資料館へ保管する。

目 次

Iはじめに	
1. 調査に至る経過.....	2
2. 遺跡の位置と歴史的環境.....	5
3. 発掘調査の概要.....	14
II造構と遺物	
1. 造構.....	18
2. 遺物	31
IIIまとめ.....	55

挿図目次

第 1 図 調訪遺跡位置図.....	1
第 2 図 発掘調査地周辺図.....	4
第 3 図 周辺遺跡分布図.....	11
第 4 図 造構実測図.....	16
第 5 図 土層断面図.....	17
第 6 図 方形状土坑等実測図.....	24
第 7 図 溝状遺構 1 号実測図.....	25
第 8 図 溝状遺構 2 号実測図.....	26
第 9 図 溝状遺構 3 号実測図.....	27
第 10 図 溝状遺構 6 号実測図.....	28
第 11 図 溝状遺構実測図 (5 号・7 号)	29
第 12 図 柱穴実測図.....	30
第 13 図 楕文土器実測図.....	38
第 14 図 土師器実測図 (1 ~ 2)	38
第 15 図 須恵器実測図.....	40
第 16 図 瓦実測図 (1 ~ 2)	41
第 17 図 白磁実測図.....	42

第 18 図 青磁実測図.....	43
第 19 図 磁器実測図.....	43
第 20 図 染付実測図.....	44
第 21 図 陶器実測図.....	45
第 22 図 石器・鉄片実測図.....	46
図 版.....	59~62

第1図 調査遺跡位置図（調査地）



I. はじめに

1. 調査に至る経過

県立妻高等学校聖陵会は、約1万8千人の会員で組織され、諸活動を通じて母校の発展に大きく寄与している。

聖陵会館建設に関しては、すでに3年前の総会で審議され、昭和62年度の役員会に於いて建設特別委員会が発足し、同年4月には趣意書も全会員へ配布されている。

この趣意書による会館建設の趣旨は、一部を省略するが次のとおりである。

妻高等学校が大正12年に創立されて以来、還暦を過ぎ、今年65周年目を迎えるに至りました。この間1万7千余名の逸材を世に送り、輝かしい伝統を誇りながらここまで発展してきました。現在、学習・スポーツ等の面で往年の光輝ある足跡に恥じないような成果をあげつつあります。

清風かおる文化の森に、希望を求め、真理を極め、清き精神を磨かんとして鋭意努力を傾注している若人の未来を拓き、栄ある伝統と歴史を維持し、一層の発展を願って「聖陵会館」の建設を計画いたしました。

会館建設の計画としては次のとおりです。

1. 趣 旨

- ・在校生の学年集会や教科学習・研修並びに部活動の合宿鍛錬の場として活用する。
- ・聖陵会総会や各回期の同窓会の集会・交流の場として利用する。
- ・広く職員の研修や父母の集会・研修の場として利用する。

2. 場 所

妻高等学校の敷地内（校庭東北部の一画）

3. 建 物

鉄骨平屋建（185坪）

4. 施設等

大集会場（500人収容可）・小会議室・研修室・管理室・風呂等。

5. 募金目標額

5千万円。

上記の趣旨によって、8名の建設特別委員会が中心となり、聖陵会館建設実現の事業が起された。

計画書にもあるとおり、当初の会館建設予定地は、同校敷地の北東隅に位置した旧校長住宅跡で、土地所有者の宮崎県へ借用申請が行われた。

県教育委員会文化課は、この申請にもとづき、予定地の適否確認のために試掘調査を実施した。その結果は、特別史跡西都原古墳群第212号の周溝が確認されたことにより、遺跡の保護上会館建設の不適地となった。

次いで、第2候補地として取り上げられたのが、前予定地の西方およそ100mの位置であった。ここは同校敷地の北方端で、縁辺部から急傾斜して下ると馬場池の溜池となっている。

そして建設候補地には、第216号古墳が所在するとともに、校舎が非常に近すぎる等の理由が重なって不適地となった。

第3候補地となったのが、今回発掘調査を実施した地域である。

現県立妻高等学校の敷地は、古くから日向国分尼寺跡と周知されるところで、大正年間旧制県立妻中学校が建設された時、多量の往時の布目瓦等が出土し、さらに数年前、今回調査地に接した位置へ図書館が建設された時も、わずかではあるが布目瓦や往時の土器片等が出土している。

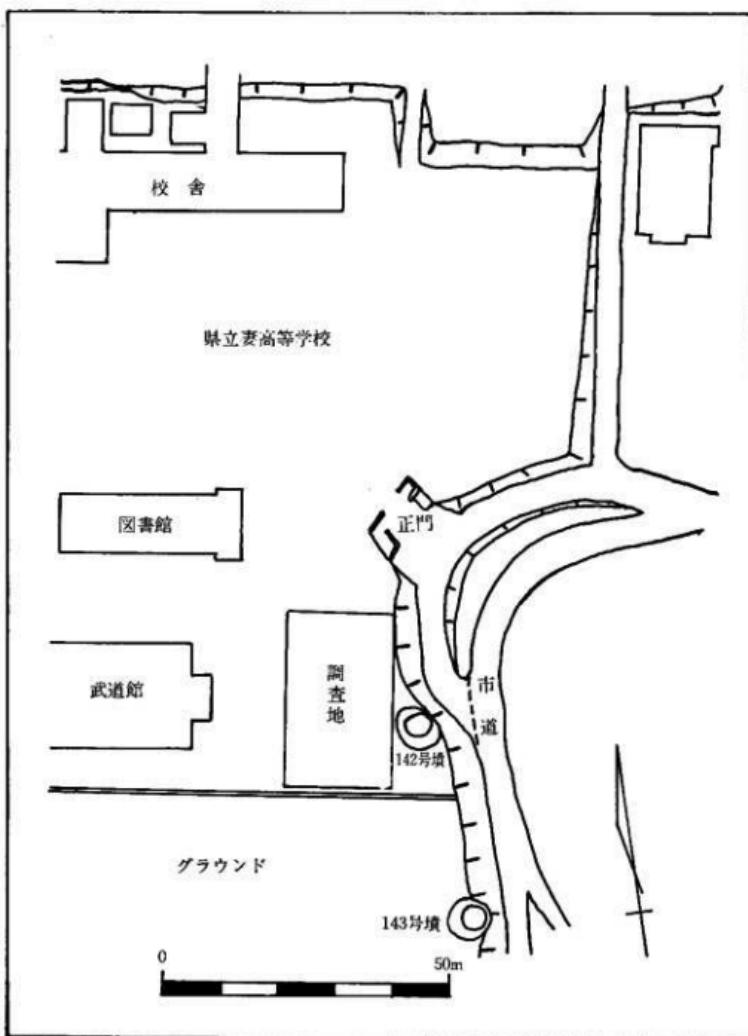
調査地は、西都市大字右松2330番地の内、520.182m²を対象とし、本校正門に接した南側であって、地形的には国分尼寺跡推定地の東縁辺部にあたり、近くには、昭和初年に建立された尼寺跡の石碑も残されている。

県文化課は、申請に伴う聖陵会館建設予定地の試掘調査を、平成元年1月26日から同年2月13日までの間に実施した。結果は、調査地の北辺部及び中央部は旧校舎の敷地であって擾乱され、遺構及び遺物の検出は無かった。

しかし南辺部からは、柱穴・溝状の遺構及び瓦片・土器片等が出土したことから、多少の擾乱は受けているものの、会館建設工事に先立って発掘調査が必要と判断された。

これらの経過や試掘調査の成果を踏まえて、聖陵会長から調査委託を受けた西都市教育委員会は、同会の建設特別委員会と、遺跡保存の問題等も含めて協議を重ね、平成元年10月2日から調査を開始し、季節的にも良天候に恵まれ、同年10月27日にはすべての調査を完了した。

第2図 発掘調査地周辺図



2. 遺跡の位置と歴史的環境

西都市は、宮崎県のはゞ中央部に位置し、日向灘の海岸からは約12kmも離れ、市域面積437.56km²を有する内陸都市であり、市の中心市街は町村合併前の、旧妻町の町並である。

妻の市街は、天領穗北の8,000石と称された穗北平野に囲まれ、その東端を流れる一ツ瀬川が、西方に連山する九州山地の泉を集めて大河となり、當時腐鰐土を運び出して、この地域に豊かな農耕地を造出した。

妻の町はまた、西城で平野が滅し町並が消える位置から、ゆるやかな坂道となって標高50～80mの西都原台地となり、昭和27年3月29日、特別史跡の指定を受けた西都原古墳群を臨むことができる。

今回実施した発掘調査の諏訪遺跡は、この中間微高地の一隅に在り、石器時代から有史・近世までの遺物も散布し、西都原古墳群に包含された古墳も各所に点在している。

奈良時代、国郡制を取り入れた律令政府では、治部省の管轄として僧尼令を定め、寺院や僧尼たちを統制下に置くという方針がとられていた。

このことは、国内産業の発達、あるいは中国文化の導入を図りながら法制の整備を行うという目的が含まれ、仏教の信仰と普及が政治の中に取り入れられたものと思われる。

そして律令制の中では、天武天皇(673～686)の頃から、金光明経・仁王護国般若経・大般若経等の、國を守るために国土安寧を説いた経典信仰が起ってきた。

これらの信仰が、政治的に具体化してくるのは奈良時代に入ってからであり、聖武天皇(724～748)時代になると、中でも金光明経(金光明最勝王経)が最も信仰され、この信仰に基づいて天平13年(741)3月には、各國へ対して國分寺・同尼寺創建の詔が發せられるにいたった。

この内國分寺は、金光明四天王護國之寺と称する僧寺であり、尼寺は法華滅罪之寺と称し、僧寺に封50戸と水田10町、尼寺に水田10町が下賜されている。

そして、一國一寺として成立した國分寺の僧は20人、尼寺の尼僧は10人と定められ、主に写経や読経が日課であった。

他にも、仏教信仰や普及等の業務も課せられていただろうから、國分両寺の運営は多額の経費を必要とし、天平16年(744)には、種々の施策が講じられるが、本文では詳略する。

また各國ごとの國分寺は、建立の令が發せられると同時に、一齊に建立されたとは思われない。このことに関しては、他国の例として在来寺院を修復して当てる等、財源によっては長年月を費している。

日向国に於いても同様の事が考察されるが、特に辺境の地でもあり、後記に述べる財源の窮屈さから、面目を整えるまでには随分と長年月を要したものと考察される。

日向国分寺に関する記載が、はじめて正史に現われるのは、天平13年に詔が発せられてより、15年も経過した後のことである。それは天平勝宝8年(756)12月20日の条「統日本紀卷第19」であって、次のように記載されている。

己亥、越後・丹波-22国を略す-豊後・日向等26国、つまり越後以下日向を加えた26国を示したものであり、文章につづいて各寺院ごとに、灌頂幡・絢綺等の荘嚴具を領下し、周忌・潔斎の時の供具となし、終ると国分寺に納めておいて、必要に応じ使用せるという意味の記載が見受けられる。

この26ヶ国の中に日向が加わっていることは、天平13年から天平勝宝8年までの間に、日向国分寺と国分尼寺が創建されたとみるべきである。

国分両寺はまた、全国的な例としても国府近くに建立されるのが慣例であった。現在、日向国府の位置は確認するまでに至っていないが、西都市大字三宅のうちの西都原周辺であったとする説は、おおかたの定説となっている。

三宅の地名はまた、「屯倉」に発した地名ともされるが、推定の域は脱しないけれども、大字三宅の地に日向国府の跡があり、日向国分寺跡とは極めて近接し、この国分寺跡の地名も国分であり、国分寺に関係して発した地名と思われる。

国分僧寺・尼寺の両寺は、前にも述べた如く天平13年に造営の詔が発せられたものであるが、各国とも諸事情によって建設工事は難行したようだ。

このことに関しては、天平19年(747)に督促の詔が発せられていることからも察せられ、さらに政府は、諸国に使者を出し国分寺建立を促進させている。

そして、郡司層の力を駆使して早期の完工をめざし、3年内に塔・金堂・僧坊を完成したら、子孫を永久に郡司に任ずるとの条件も出されて奨励した。

また寺領田として、それまでの各10町に、僧寺が90町・尼寺が40町を加え、僧寺は水田100町・尼寺50町と定められ、さらに天平勝宝元年(749)には、僧寺が1,000町・尼寺は400町までの墾田所有が認められるにいたった。

日向国分の両寺が、果してそうであったかを知ることには難があるが、「延喜式」の主税によると、日向国分寺料は一万束とみえ、九州管内最高が肥後の47,887束、日向を除した最低が豊前の14,274束であり、これに比しても差異が認められ、僧寺1,000町・尼寺400町の日向国分両寺、ひいては日向国の経済的な貧困さまで物語っているようだ。

これより、日向国分両寺に関する記載は見受けられないが、全国的に拡まった莊園制下に

よる国分両寺の運営はきびしく、しだいに衰退の途をたどることとなり、日向国分両寺もその例外とはならなかった。

建久8年(1197)の「建久國田帳」には、国分寺田20町・右児湯郡内・地頭土持太郎宣綱。尼寺田10町・右同郡内・地頭同人である。僧寺1,000町、尼寺400町が認められた往時に比して、衰退のきびしさを知ることができる。

江戸時代ともなると、衰退の度はますますきびしくなり、衰亡寸前の日向国分寺を再興したのが木喰上人であった。

木喰上人・すなわち木喰行道は、享保3年(1718)甲斐国に生れ、文化7年(1810)93歳の長寿で示寂した。彼が仏門に入ったのは21才のとき、神奈川県の大山不動尊に参籠し、子易町で真言宗の高僧から仏道を説かれて感動したことにはじまる。

そして宝暦12年(1762)には、常陸の木喰觀海上人に従って木喰戒を受け、木喰五行・または明満と称し、安永2年(1773)日本廻国を発願して諸国行脚の旅に出る。

全国巡録を目的とした上人は、各地に多くの仏像を彫して残しているが、彼は、真言宗を基礎とした念佛、及び禪宗の教理を含んだ思想の持ち主であって、彫した仏像のすべてが、彼独自な自由奔放の様式で刻されている。

通称木喰上人が日向国分寺に滞在したのは、天明8年(1788)4月20日に同寺へ詣でてからで、寛政9年(1797)までの凡そ10年間、年令は71歳から80歳と上人の晩年期であった。

諸国行脚の僧であった上人が、どうしてこの地だけ長期間滞在したのか、柳宗悦の「日州国分寺に於ける上人の大業」の中に、上人の手記として次のように記載される。

「ヲヨソ日本国々山々タケタケ島々ノ修行ヲ心ニカケテ、日本アラアラ成就ニイタル、ソノセツ九州修行の節ニイタッテ、日向国分寺ニヨン所ナキインエンニヨッテ、トドマリテ住ショクイタシ、三年目ノ正月二十三日ニ、シュ火ニアイ、ソレヨリ七年ヶ間ナンギョウクギヨウニテ、ガランコンリュウ、成就シテノチ寛政九己歳四月八日ニ国分寺出立ス……云々」
このように、日向国分寺に関する記録は残されるが、僧寺と木喰上人については、本文の主題から少し逸れるため略するが、尼寺に関しての記録は皆無といってよい。

日向国分僧寺と同時期に建立された尼寺は、僧寺の北方凡そ300mと、指呼の間に跡地が推定され、現在この地には県立妻高等学校が建設されている。

しかし、尼寺跡と周知はされるが、跡地とする資料は乏しく、大正時代西都原古墳の発掘調査と、日向古代史の解明に尽力された有吉忠一宮崎県知事の舍弟にあたる、同県知事有吉実(任期・昭和5年8月~同6年12月)の筆による、「尼寺跡」の碑文を残した石碑が、校庭の一隅に所在するだけである。

この石碑も、尼寺の在所を詳らかにした確定的な資料とはならないが、現地から妻市街へ下る東方の坂道は、古くから尼寺坂と称されていることから、この附近一帯が尼寺跡の在所とする資料の一つにはなるだろう。また、妻高等学校の前身・旧制妻中学校が建設されたとき、往時の布目瓦や土器片等がこの地から多く出土している。

県立妻高等学校は、昭和20年8月15日の終戦後、動搖した教育界の中から六・三・三制の学制改革が行われ、昭和21年3月31日に制定された「教育基本法」「学校教育法」によって、旧制中学校が高等学校となったものである。

このとき、男子生徒のみの県立妻高等女学校と合併し、昭和23年4月1日、男女共学の宮崎県立妻高等学校として発足した。

新制妻高等学校は、当時普通科・農業科・商業科・家庭科・農業科の定時制とがあり、総合的な高等学校であったが、西都市内調査に、県立西部商業高等学校が、昭和38年4月1日開校して商業科は閉鎖、さらに農業科と定時制も閉鎖されたことによって、妻高等学校は、普通科と家庭科だけの課程となった。

旧制妻中学校が建設された妻町は、下穂北村が大正13年(1924)4月に町制を施行し、下穂北町となった後、同年8月に妻町と改称した町で、西部児湯郡内の農林産物集散町として発展した。

農林産物集散地として栄えた妻町は、淋しい限りではあるが文教の町と称するには至らない。これに比して児湯郡東部の中心地高鍋町は、旧城下の町であり多くの人材も輩出し、一般的に文教の町と称されていた。

藩割時代の妻の町は、下穂北村の北辺上穂北村境に位置し、町並の大字妻だけが佐土原領の飛地として統括され、他は上・下穂北村全域が天領地となっていた。

そのためか、武士の後身者が極度に入口に比して少なく、文教施策はおくれがちで、明治・大正時代はわずかに行政的な政策が留意された程度のものであった。

現西都市は、旧児湯郡の西部7町村が、西米良村だけを残して合併し、昭和33年11月1日市制を施行し、西都市として発足しているが、旧称としては、西児湯地区であり、その中心地は妻町であった。

そして、高鍋町を中心とする東児湯郡と、妻町を中心とする西児湯郡の間に、先に起った児湯郡内の県立中学校設置問題にからみ、大正10年(1921)末頃から誘致の為の政争が起ってきたのである。

西児湯では、当時下穂北村であった妻町が中心となり、県立中学校を西児湯地区に誘致しようと、期成同明会を結成して運動がはじめられた。

当時の事例を記載したものに、昭和43年8月・県立妻高等学校編創立50周年記念誌の、「我

中学校設立運動の回顧・聖陵子」があり、その中に、次のように記されている。

「県に対する寄付金15万円、それに敷地ならびに道路及び地均費10万円になんなんとする額である。

そればかりでなく、これまでの諸雜費を計算してみると夥しい額に達すると思う。その上、郡有林として永年その経費を分担して經營した共有財産は、これを東部の中学校に譲与することとまでなったのである。」と。

昭和元年度の記録に残された妻町歳出総予算額は、90,336円であった。この予算額を見る限り、当時の中学校誘致に関する費用は、行政予算だけではなく、個人からの募金が集められたことはいうまでもない。

それ程、西児湯への県立中学校設置が希望され、特に妻町が宮崎県へ融通した金額は大であったと考察されるが、問題を含みながらも政争に勝ち、県立中学校が妻町に設立された。

高鍋町を中心とする東児湯でも、まもなく組合立の私立高鍋中学校が開設されているが、県立妻中学校設立の最終的な決め手は、反別271町5反3畝の郡有林譲与であったといえる。

妻中学校設立に関しては、他にも複雑な諸問題が多すぎたが、とにかく大正11年11月18日の県議会に於いて可決され、翌12年4月12日、宮崎県立妻中学校として開校した。

開校した当時の同校は、施設が無かったことから下穂北村の旧小学校を借り上げ、定員250名の認可がおりたことから、学級増加等もあって、翌14年4月14日、現在の校地諏訪に校舎が新設され、同20日より授業が開設されるに至った。

妻中学校の開設はまた、妻町を中心とした西児湯の町村民を刺激することとなり、女子教育の場も必要とする機運がしだいに高まり、運動も連鎖的に広まっていった。

それまで、県内に於いても女子中等教育は、まことに低調なものであり、県立による宮崎高等女学校の創立は明治32年(1899)であるが、大正2年(1913)の公立高等女学校は1校、私立校1校、他に公立実科高等女学校1校と3校にしかすぎなかった。

妻中学校設立後、西児湯に女子中等教育運動が起ってくるのは、大正13年頃からのことである。この運動計画は実科高等女学校の開設が当初の目的であった。

このことに関しては、妻町・上穂北村・三納村・三財村・都於郡村・新田村の6町村が、組合立の妻実科女学校設立に向って事に当っている。

だが、組合立となると相当の経費も必要とするし、特に妻中学校へ対する寄付金等も多い時期であり難行する結果となった。

とにかく、曲折はあったものの女子中等教育の場を必要とし、妻実科高等女学校の設立申請は初まった。しかし認可が容易でないと予想されたことから、補修料として大正14年5月

3日に開校せざるを得なかった。

開校当時は、妻中学校が当初借上げて授業を行っていた旧小学校を校舎とし、大正15年4月30日付で、定員200名の認可があり、妻実科女学校として発足した。

妻実科女学校は、当初2年制の学校として申請されたものであるが、これが認可されたときは3年制の条件が付されていた。こうして、第1回の卒業生を昭和2年に送り出している。

そして昭和3年1月16日、県立妻高等女学校としての認可も下されたが、改称できたのは昭和19年1月1日のことであった。

本女学校は、のち妻中学校と合同し、県立妻高等学校となるが、このことは前にも述べた如く、昭和22年度に採用された六・三・三制の改革によって、男女共学による新制妻高等学校が、同年4月1日に発足して始まったものである。

以上、遺跡の位置と歴史的環境について、特に学校創設の一部までも述べてきたが、今回実施した発掘調査は、旧制妻中学校及び妻高等女学校、ならびに新制妻高等学校の卒業生によって組織された聖陵会会員の悲願とした聖陵会館建設であり、これに伴った事前調査であった。

そこで、旧両校の設立経過を、会員の皆様が再度確認され、聖陵会館建設の目的が果せるよう、特に希望し本項で述べたものである。

第3図 周辺遭跡分布図



遺跡分布地名表

妻地区 1001~

遺跡番号	名 称	所 在 地	種 別	時 代	旧番号	文 獻	備 考
1001	西都原古墳群	大字三宅・妻・童子丸・右松	古 墓	古 墓	16-13	奈良県史報告書 ほか西都市史等	S.27.3.29. 国特別史跡指定
西都原古墳群明細							
			前方後円墳		円 墳	方 墳	
	大字三宅字原口二		4 基		52基		
	◆ 笹貫畠				4 基		
	◆ 酒元ノ上		4 基		37基		
	◆ 東立野		7 基		40基		
	◆ 西都原東				53基		1基滅失
	◆ 丸山				3 基	1 基	
	◆ 寺原		3 基		22基	1 基	3基滅失
	◆ 原口		1 基		7 基		
	◆ 須先				1 基		
	◆ 国分		1 基		2 基		
	◆ 尾筋東上		3 基		2 基		
	◆ 尾筋西上		1 基		6 基		
	◆ 尾筋東下		1		2 基		
	◆ 尾筋西下				3 基		
	◆ 竹之脇		1 基				
	◆ 鳥子長田				3 基		
	◆ 堂ヶ島				11基		
	◆ 寺崎				2 基		
	◆ 馬場崎				1 基		
	◆ 上ノ宮西				1 基		
	◆ 寺原脇				1 基		
	大字妻字妻間				1 基		
	大字童子丸新立		1 基		10基		
	◆ 権現原				2 基		
	大字右松字剣田				1 基		
	◆ 寺馬場				1 基		
	◆ 鶯田		1 基		11基		

遺跡番号	名 称	所 在 地	種 別	時 代	旧番号	文 獣	備 考
1002	清水西原古墳群	大字清水・三宅	古 墓	古 墓	16-30 16-31 16-32	日向地誌	S.9.417. 県指定史跡
清水西原古墳群所在地明細							
	大字清水字松崎		前方後円墳	2基			
	・ 寺山	円 墓		4基	1基滅失		
	大字三宅字西原	円 墓		19基	1基滅失		
1003	上ノ原遺跡	大字清水字上ノ原 寺山	散布地	古墳～ 平安			
1004	寺山遺跡	大字清水字寺山	散布地	古 墓			
1005	清水遺跡	大字清水字 大瀬・松崎 久原	散布地	弥生～ 古墳			
1006	下尾筋遺跡	大字三宅字 尾筋東下 尾筋西下	散布地	弥生～ 平安	16-28	日向国史	
1007	上尾筋遺跡	大字三宅字 尾筋東上 尾筋西上	散布地	弥生～ 平安	16-28	日向国史	
1008	日向国分寺跡	大字三宅字国分	寺 跡	奈良～ 江戸	16-33	日向地誌・ 発掘 調査報告書ほか	
1009	国分遺跡	大字三宅字国分 大字右松字鷺田	散布地	绳文～ 江戸			
1010	上宮遺跡	大字三宅字 上ノ宮東 上ノ宮西	散布地	弥生～ 平安			丹波小野伝承地を含む遺跡
1011	上宮古墳	大字三宅字上ノ宮西	円 墓	古 墓			2基(1基は古滅失)
1012	上宮城跡	大字三宅字上ノ宮西	城 跡	中 世			
1013	三宅城跡	大字三宅字原口	城 跡	室町～ 安土桃山		日向記・ 日向地誌	
1014	諏訪遺跡	大字三宅字毘沙門 大字右松字蟹田	散布地	绳文～ 古墳			
1015	酒元遺跡	大字三宅字 須先・資賀郷 山ノ前堀	散布地	弥生～ 江戸	16-29		
1016	堂ヶ島遺跡	大字三宅字須先・資賀郷 大字三宅字平瀬	散布地	弥生～ 平安			
1017	寺崎遺跡	大字三宅字 寺崎 大字右松字鷺田 大字妻字上妻	集落跡	弥生～ 江戸	16-26		旧番号は坂元遺跡
1018	上妻遺跡	大字右松字 鷺田 大字妻字上妻	散布地	绳文～ 江戸			
1019	経塚	大字妻字上妻	経 塚	平 安	16-27		都万神社境内
1020	法元遺跡	大字三宅字 堀崎 大字右松字鷺田 大字妻字上妻	散布地	弥生～ 江戸			
1021	童子丸遺跡	大字童子丸字権 内・上園 寺・馬場	散布地	绳文～ 江戸		日向国史	
1022	上園古墳1号	大字童子丸字上園	円 墓	古 墓			
1023	上園古墳2号	大字童子丸字上園	円 墓	古 墓			
1024	上園古墳3号	大字童子丸字上園	円 墓	古 墓			
1025	石貫遺跡	大字三宅字石貫平ノ下	散布地	绳文～ 江戸	16-25	佐土原歴史稿	伝承遺跡の保存地域
1026	原口遺跡	大字三宅字原口二ノ西 原口・原口二	散布地	弥生～ 平安		日向国史	
1027	寺原遺跡	大字三宅字寺原・寺原屋	集落跡	弥生～ 平安	16-24	日向国史	

3. 発掘調査の概要

調査地は、前項でも述べたとおり国分尼寺跡の推定地で、現県立妻高等学校の敷地内にあり、同校正門の南に接した植え込みのある校庭で、520,182m²を対象に調査を実施した。

地形は、元来南東へゆるやかに下降した様相を示し、縁辺部から東方に向って急落し、調査地の北端と南東隅の差は、極度な差異が認められているし、過去に幾度かの整地痕が残されている。

特に、調査地の北約3分の2程は、旧制妻中学校建設及び同校撤去時には、かなり大がかりな整地作業が実施されていて、大半が深く擾乱された土地であった。

現状は、乱雜な植樹の樹木が多い平坦な校庭であり、調査のため移植が予定される樹木を残して伐採し、遺構の保存状態及び土層確認のため、略東西・南北に、幅1.5メートルのトレーニチを十字形に、他に3ヶ所を加えたあと南辺は、前年度県文化課が実施した試掘調査の結果を参考とした。

このトレーニチ調査の結果を基本とし、北辺から順次に重機を使用して表土を剥ぎ取り、本格的な調査に入って遺構の検出作業を実施した。

調査区の設定は、調査地が南北約30メートル、東西約18メートルと細長く、方6メートルのグリッドを組み、北から南へA・B・C・D・Eと5区分し、西方から1・2・3列とした。

調査地の内、ABCの各区1列2列は、旧制妻中学校の校舎跡で、コンクリート基礎が確認され、地下深く掘り込まれており、さらにコンクリート壁等の残骸が、同区3列まで遺構検出層以下に埋れ込まれ擾乱されていた。

このような土地の現状であって、遺構は検出されず、遺物は表1に示すとおり、C1に14点、C2に10点、C3に13点が出土しただけである。

D区及びE区は、地表下1メートル余に達するまで、過去に盛土・埋土・整地等の作業が繰り返され、アカホヤ層上面まで擾乱されるが、遺構確認層が検出されたことは幸いであった。

調査結果は、第4図に示すとおり、溝状遺構7条、土坑4基、柱穴59個が検出された。しかし、検出された柱穴群の中には、柱穴とするに疑しきものも含まれ、これらを合しても、建物の規模を確認できる配列を見るには至らなかった。

遺物は、D区・E区に集中し表1に示すとおり出土し、主流をなすのが土師器であり、269点が出土している。

縄文土器、土師器、須恵器、瓦、陶磁器・石器等、総計305点のこれらの遺物は、大半が

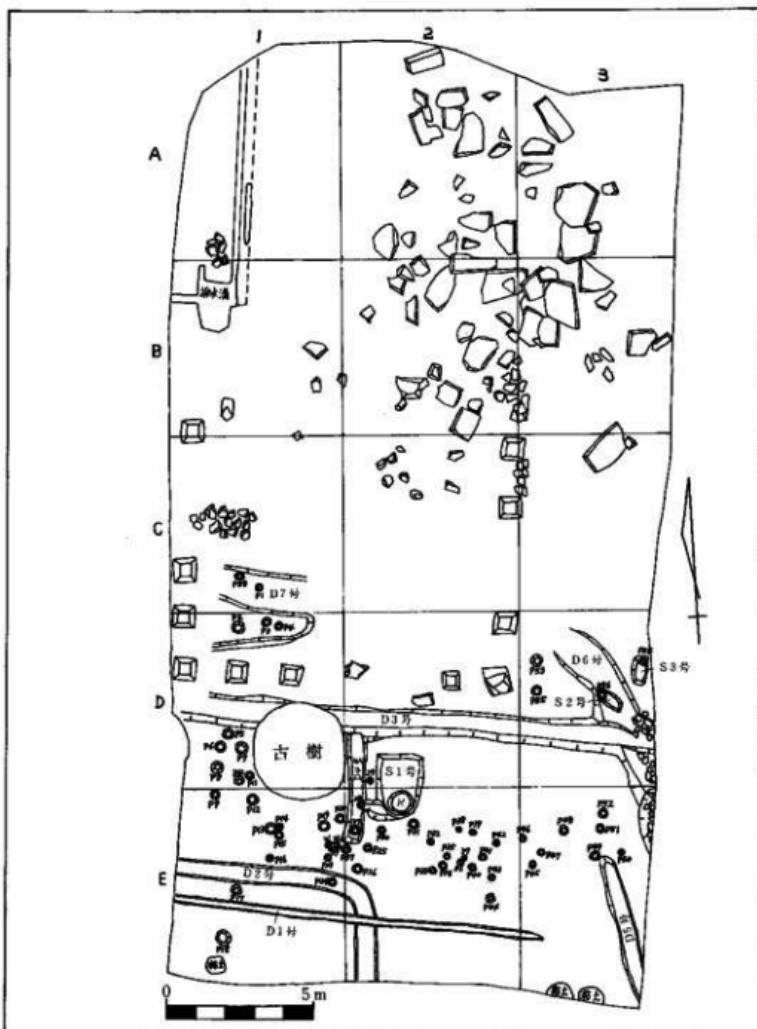
検出された遺構外に散乱し、わずかな遺構内出土の遺物も、遺構に伴ったものと断定するには難が多く、すべてが流入遺物と認めざるをえなかった。さらに遺物は、大半が小片として出土し完形品は皆無であった。

遺構内の埋土に関しては、すべて黒色土であったが、土層については、層位の基本と計画した各トレンチが、すでに埋土等の擾乱地であったことから、調査地南辺D区・E区の西壁によって確認した。

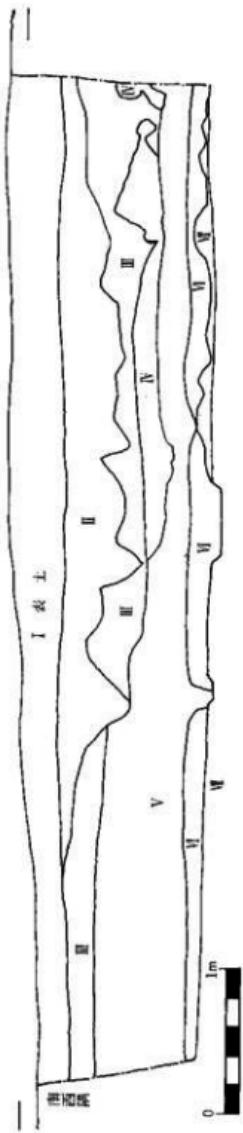
なお遺物は、第Ⅶ層の上層から出土したものである。それ以下の層位からは出土していない。

- | | |
|-----------|-----------------|
| 第Ⅰ層・表 土 | (砂利混入・近年埋土) |
| 第Ⅱ層・黒色土 | (砂利混入土) |
| 第Ⅲ層・黒褐色土 | (近年の埋土) |
| 第Ⅳ層・褐色土 | (粘質土を含む) |
| 第Ⅴ層・黒褐色土 | (アカホヤ細粒・土師細片混入) |
| 第Ⅵ層・黒色土 | (土師細片少量混入) |
| 第Ⅶ層・明黄褐色土 | (赤ホヤ層) |

第4図 透視実測図



第5図 土層断面図



Ⅱ. 遺構と遺物

1. 遺構

本調査によって検出した遺構は、方形状土坑3基、円形土坑1基、溝状遺構7条、柱穴59個である。

出土遺物は、表Ⅰに示すとおり繩文土器片6点、土師器片129点、須恵器片17点、布痕土器片4点、瓦器片3点、瓦片32点、陶磁器片159点、石器類3点、鉄片2点、総計305点が出土している。

方形状土坑1号（第6図）

この土坑は、D2・E2両区にまたがって検出した遺構で、規模は、長軸中心延長線が磁北より2度東に寄り、上縁径 $2.33 \times 1.54m$ 、床面 $2.10 \times 1.27m$ 、深さ0.20mと、概略長方形をなす遺構である。

遺構の北壁上縁長は1.50m、床面は1.33mを計測し、平面状の床から角度を有して斜上する。東西両隅とも角隅をなす。

東西両壁のうち西壁は、直に南へ延びているが、東壁は、中央附近から内湾して延び、南壁が略円形状となり、北壁に比して狭くなっている。

床面南端にはまた、径0.92mの円形土坑が掘り込まれ、さらに、西端に隣接する溝状遺構4号は本土坑と並行し、溝の中程から円形土坑へ流れ込む変形溝が構成され、土坑1号と一緒にした遺構状を呈している。

遺物は、遺構の上層位から土師器片・陶磁器片・瓦片等が出土しているが、擾乱層であることから、同遺構に伴った遺物とは考査され難い。遺構内から遺物は出土していない。なお本土坑の構築年代・使用目的等は不詳である。

方形状土坑2号（第6図）

この土坑は、D3区の溝状遺構6号内に検出された遺構である。規模は、中心部の長軸延長線が磁北より52度西に寄り、上縁の径が $1.01 \times 0.43m$ 、床面 $0.87 \times 0.28m$ 、深さ0.27mと、長方形を呈している。

同遺構が検出された溝状遺構は、南に傾斜する遺構であり、この土坑も南北端上縁の高低差12センチが認められ、北端上縁を基準に深さ等を計測した。

遺構内北辺部には、径20センチ、深さ52センチの柱穴56号が掘り込まれているが、遺構に関係したピットとは考察され難い。さらに、本土坑の使用目的等は解明するに至らなかった。

遺物は、遺構内の黒色埋土に混じて、土師器片4点、磁器染付片2点が出土し、さらに、擾乱された上層位からも土師器片が出土しているが、遺構に伴った遺物ではなく、遺構内出土の6点も、流入遺物と考察される。

方形状土坑3号（第6図）

この土坑は、前項土坑2号に東面し、約0.8mの位置に検出された。中心部の長軸延長線は、磁北より東に11.5度片寄り、規模は、中心部上縁の径 $0.99 \times 0.54\text{m}$ 、床面 $0.64 \times 0.31\text{m}$ 、深さ 0.21m の長方形を呈する。

地形は北高南低の層位で、残存北壁上及び南壁上の高低差9センチが認められ、北壁上縁を基準に深さ等は計測したものである。

本遺構の北辺床面には、前項土坑2号と同様径18センチ、深さ40センチの柱穴54号が掘り込まれているが、この土坑と関係する柱穴とは考察されない。しかし、近接する土坑2号に、同様位置から検出されたことは、今後の課題として残される。

遺物は、遺構内からは伴出せず、上層の擾乱黒色土に混じて少量の土師器片が出土している。この遺物も遺構に伴つたものかは詳らかでなく、さらに、本土坑の構築年代・使用目的は解明されていない。

円形土坑（第6図）

円形土坑は、前項方形状土坑1号でも述べているが、同遺構の南辺床面に検出された遺構である。

S1号遺構と本土坑が同一遺構と考察されないのは、S1号の南壁が円形土坑の中心位置附近と思考され、西壁構造がや、隅丸の様相を呈して、幾分円形土坑の中央部に向っているからである。

円形土坑の規模は、S1号床面に於ける略南北径 0.84m 、東西径 0.92m 、床面南北径 0.74m 、東西径 0.77m 、深さ 0.13m を計測するが、S1号南壁上縁を基準にすると、上縁径は南

に9センチ延び、深さも9センチ深くなる。

その他については、S 1号で述べているが、遺構内からの出土遺物はなく、上層位の黒色土に混じて土師器片等が出土しているが、遺構に伴った遺物と考察するには難がある。なお埋土は黒色土であり、遺構の構築年代・使用目的等は解明されていない。

溝状遺構1号（第7図）

溝状遺構は、大小7条の遺構が検出されている。1号遺構は、調査地南端部のE 1区に西方調査地外から延びていて、東方に略直線様に検出され、E 3区内に約1m進んで消滅する。

検出規模は、長さ12.65m、上縁幅約0.27m、底面幅約0.17m、深さ約0.10mであって、小溝ではあるが、完全な溝の形容を示している。さらに、西端検出部と東端消滅部の床面高低差は0.23mである。

この遺構の中央部には、横幅約0.65mの溝状遺構2号が横断し、遺物は、主にこの附近の上層位に集中して散乱状に出土している。埋土は黒色土である。

溝状遺構2号（第8図）

この遺構は、前項溝状遺構1号（D 1号）の北、約65センチの間を置いた位置に並行し、D 1号同様、西方調査地外の壁面から延び出して検出された。

遺構は、E 1区からE 2区に延び、ここから急曲して南に転向し調査地外の壁面下に入り込んでいる。検出規模は、長さ9.55m、上縁幅約0.65m、底面幅約0.47m、深さ約0.10m、曲折後はや、横幅が広くなり、上縁幅約0.78m、底面幅約0.69m、深さ0.08mを計測する。

また曲折後の遺構には、前項でも述べているがD 1号溝が横断し、2号溝底面からさらに0.11m程深く掘り込まれている。

遺物は、土師器片・瓦片数点が底面から出土しているが、この遺物は流れ込みのものと考察される。遺構内検出の柱穴24号、及びD 1号間の柱穴17号は、この遺構に伴つたものではない。

遺構の形容は、や、半月状の床面を有する個所も認められるが、全体的には平底であり、壁面の立ち上りは、内湾気味と直と一定していない。埋土は黒色土である。

溝状遺構 3号（第9図）

この遺構は、D1調査区からD3調査区にかけて、東西に横断する大溝として検出された。遺存層による検出規模は、長さ15.20m、上縁幅約0.95~1.10m、底面幅約0.47~0.62m、深さ0.36~0.48mであって、完全な溝の形容を示している。

溝の底面は半月状をなして中央部が低く、床面と壁面が鮮明に区分され、内湾気味に丸味をおびて両壁面は立ち上がる。しかし、西端検出部から中央部附近までの北側壁は、上層約2分の1程が擾乱層で、横幅等は推定せざるを得なかった。

またD1調査区には、移植予定の古樹が残され、移植後に調査も考慮されたが、移植によって遺構確認層まで破壊されることから、径約3mの円形地が未調査に終っている。

本遺構の東端はまた、北方から南に延びた溝状遺構6号がやや斜に横断し、複雑な遺構形容を示しながら、底面は鮮明に東方調査地外へと延びている。

遺物は、このD6号と切合した区域を中心に、土師器片等の多くが出土しているが、いづれも流入遺物であって遺構伴出のものではない。

なお、検出遺構の底面に於ける西端、及び東端の高低差は0.49mであるが、この高低差は、東端から約3mの位置附近より急下降していることがある。埋土は黒色土であった。

溝状遺構 4号（第6図）

この遺構は、前項方形状土坑1号、及び円形土坑でも述べているが、方形状土坑1号の西側に並行した形容で、E2区からD2区にかけて検出された。

規模は、検出長3.75m、上縁幅0.53m、底面幅0.36m、深さ約0.10mで、両端高低差は北端が低く約2センチを計測する。

溝の南端床面には、柱穴27号、この柱穴から約70センチ北方の床面東端には、柱穴28号と2個の柱穴、さらに方形状土坑1号の間に柱穴29号が検出されたが、遺構に伴った柱穴ではないと想定される。

溝は、E1区及びE2区境の中央附近で発生し、グリット線に沿って北上する。北端は横断する大溝の溝状遺構3号内へ流入して終るが、その北辺は擾乱層であって、本遺構がさらに北に延びているかは確認されなかった。

埋土は黒色土である。遺物は、上層位の黒色土に混じて土師器片等が出土しているが、遺構に伴った遺物ではない。

溝状遺構 5号（第11図）

この遺構は、E 3区の中央部に発生し、調査地の南東隅壁面下にかけて検出された遺構である。

形容は、概略直に延びた浅い遺構で、規模は、検出長が4.63m、上縁幅約0.62m、底面幅約0.49m、深さ約0.07mであって、両端高低差は約6センチと南辺が低い。

遺構は、溝とすべきであるが、検出長が4.63mと短かく、延長溝は調査地外に延びていることから、使用目的等を記すことは不可能であり、埋土は黒色土、遺物も伴出しなかった。

溝状遺構 6号（第10図）

この遺構は、溝状遺構 3号の東端部を斜に横断し、延長は、E 3区の東壁下に潜入して終る。溝の発生地はD 3区の北西隅附近。

また、D 3号と切合した箇所の北辺近く底面には、方形状土坑2号が掘り込まれており、さらに、近隣した東方調査地外の、西都原古墳第142号の葺石とも想定される礫石が、坑内に多く散乱していた。

規模は、検出長6.45m、上縁幅約1.25m、底面幅約0.92m、深さはA点0.25m、B点0.61mと南辺が深く、概略S字型を呈して調査地外に沈んでいる。

さらに、この遺構の南辺部には、上縁を半月状にした約2m長さの遺構が認められているが、溝状遺構 6号の底面とは関連せず、独立坑と想定されるも、壁面が傾斜して約30センチ下降し、床面に達せず調査地外となり、遺構としての検出はできなかつた。

なお、不検出土坑内には古墳の葺石とも考察される列石が認められたが、第142号墳の周溝とするには不均齊で、別個の滅失古墳周溝とも考察することができる。

D 3号及びD 6号の切合部は、6号底面から3号溝は、さらに約15センチ深く掘り込まれており、この附近から瓦片、土師器片等の遺物が、埋土に混じて多く出土している。6号坑の南北両端高低差は0.68mと、南へ急速に下降する。

この遺構の北端は、東西両壁とも内湾気味で消滅しているが、や、方向を西に向けており、次項の溝状遺構7号と接するとも考察されるが、中間位置の層位がすでに擾乱を受け、確認するには至らなかった。

溝状遺構7号（第11図）

この遺構は、C1区内に検出され東に延びた遺構であるが、東端部より東方は溝状遺構6号近くまで擾乱された土地で、延長遺構等は確認されていない。

遺存層による遺構の規模は、検出長3.15m、上縁幅約1.41m、底面幅約1.23m、深さ約0.14mで、底面には、柱穴1号・58号の2個が検出されている。この柱穴は遺構に伴ったものではない。

形容は、北壁が概略直に延びているのに比して、南壁はゆるくくの字型に中央部のふくらみが認められる。底部はや、平面であるが、両端は丸味をおびて壁面となり、壁は内湾気味に立ち上がる。

遺構の南方壁上は、西方から舌状様の遺存層が残され、この層の南端には溝様の落ち込みが認められるが、約11センチ斜下降して床面となり、この床面も約10センチ延びて擾乱層のため消滅する。

この7号遺構が東進し、東端の溝状遺構6号と接合するかに見受けられたが、その間の層位が、県立妻中学校建築時の基礎工事によって擾乱された地域であり、確認するには至らなかった。遺構の埋土は黒色土であり、遺物は出土していない。

柱穴（第12図）

柱穴は、調査地の南辺部に集中して総計59個が検出されたが、径15~25センチの小規模のもの、あるいは不整形のものが多く見受けられた。

規模は、径12~50センチと不安定で、最多のものは径25センチ前後、深さも8~43センチで全体的には非常に残い。

埋土は、18号だけ粘質土であって、他はすべて黒色土であった。また埋土に混じて土器小片や布目瓦片が出土しているが、これらの遺物はすべて流入遺物である。

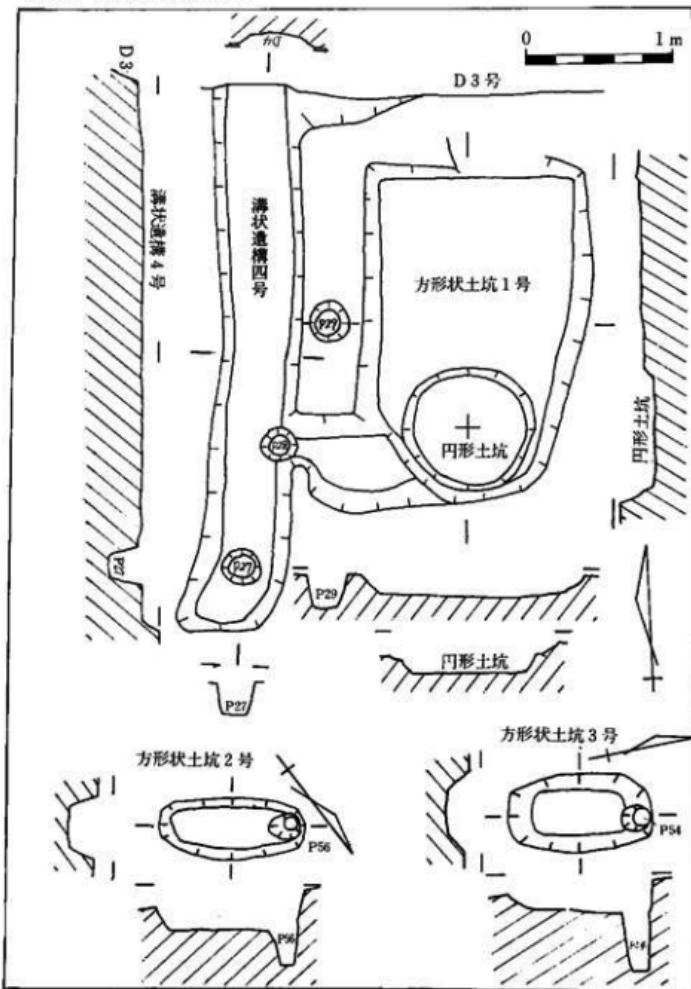
検出した柱穴の中には、柱穴とするに疑しきものも多く含まれているが、総数59個の柱穴を総合しても、配置が不安定であり建物跡の配列を確認するには至らなかった。

第12図に示す柱穴34個は、これらの不安定な柱穴を抽出し図示したものであるが、図にも示すとおり、全体的に小さく、浅い柱穴ということができる。

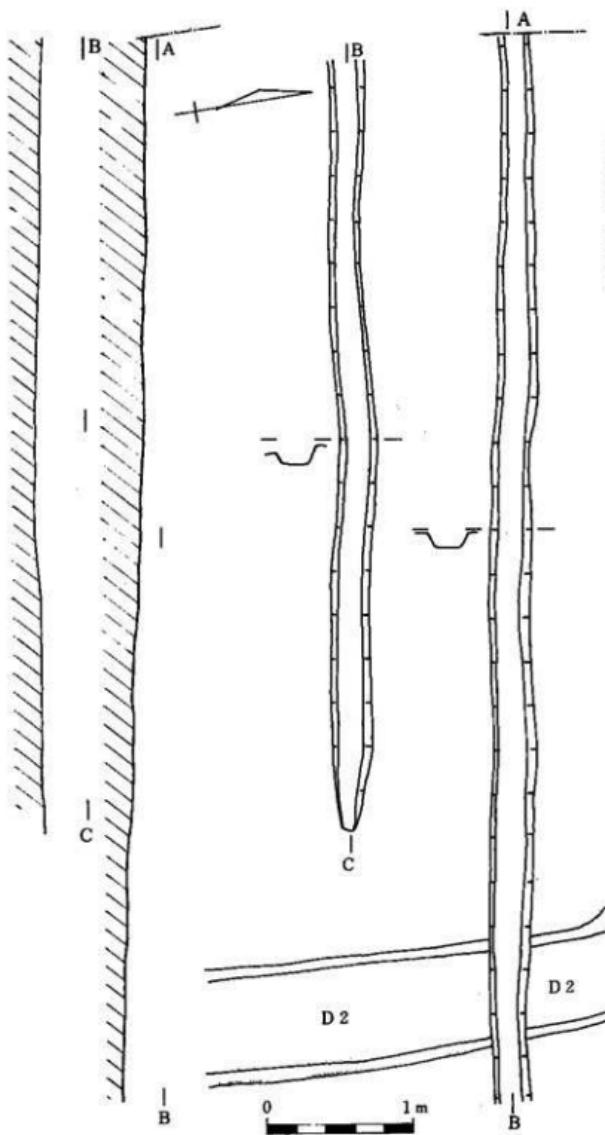
なお、E1区の南辺に1個、及びE3区内南辺に2個、計3個の基台様粘土質土が検出された。径70~90センチ、高さ6~10センチである。

他に遺構には検出されず、南辺調査地外に関連遺構が埋蔵されると考察されるが、今回調査では確認が不可能であり、所在説を記録するに留めるだけとなった。

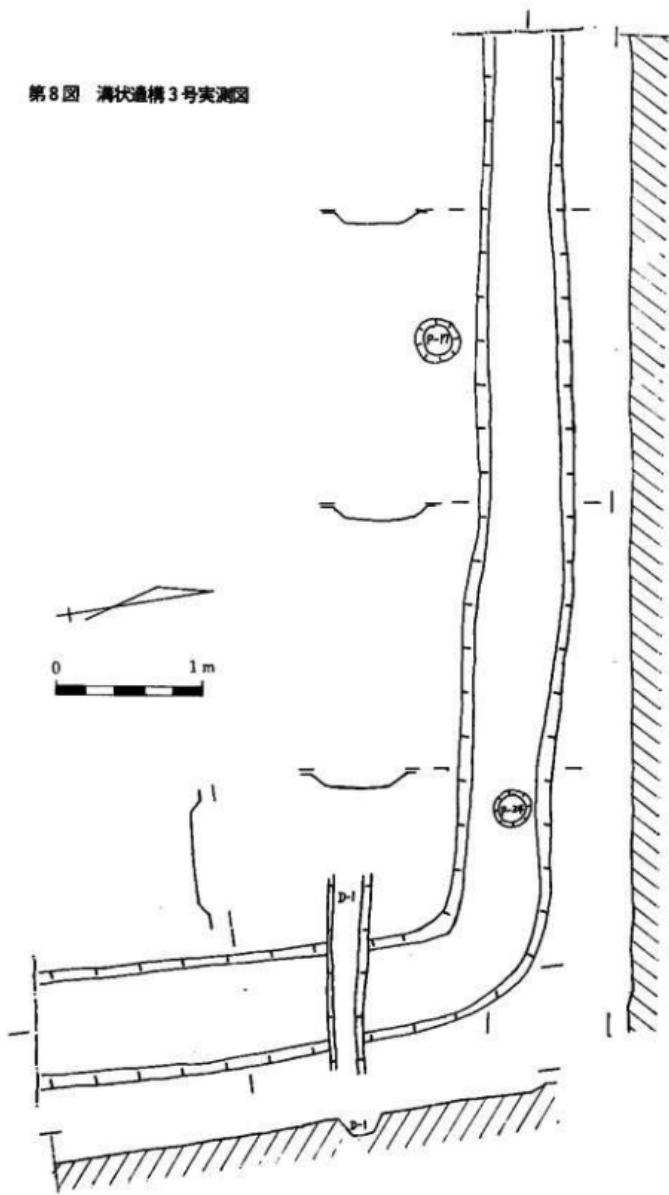
第6図 方形状土坑等実測図



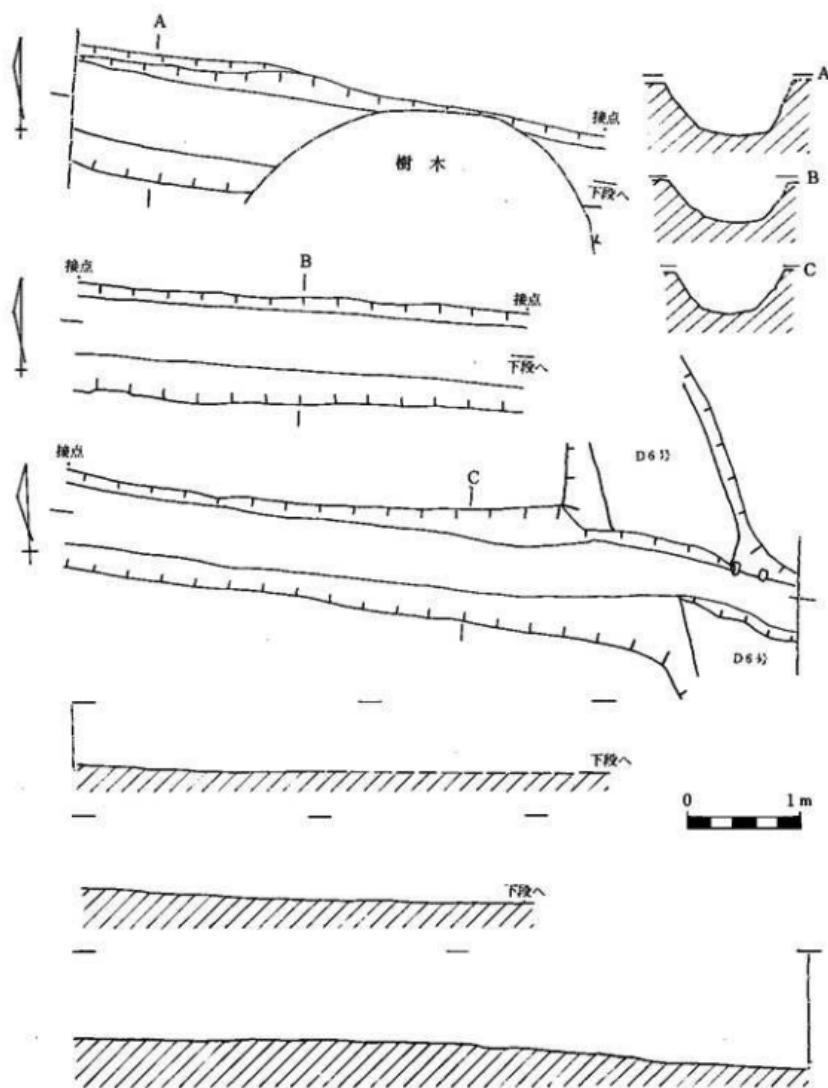
第七圖 溝狀遺構一號實測圖

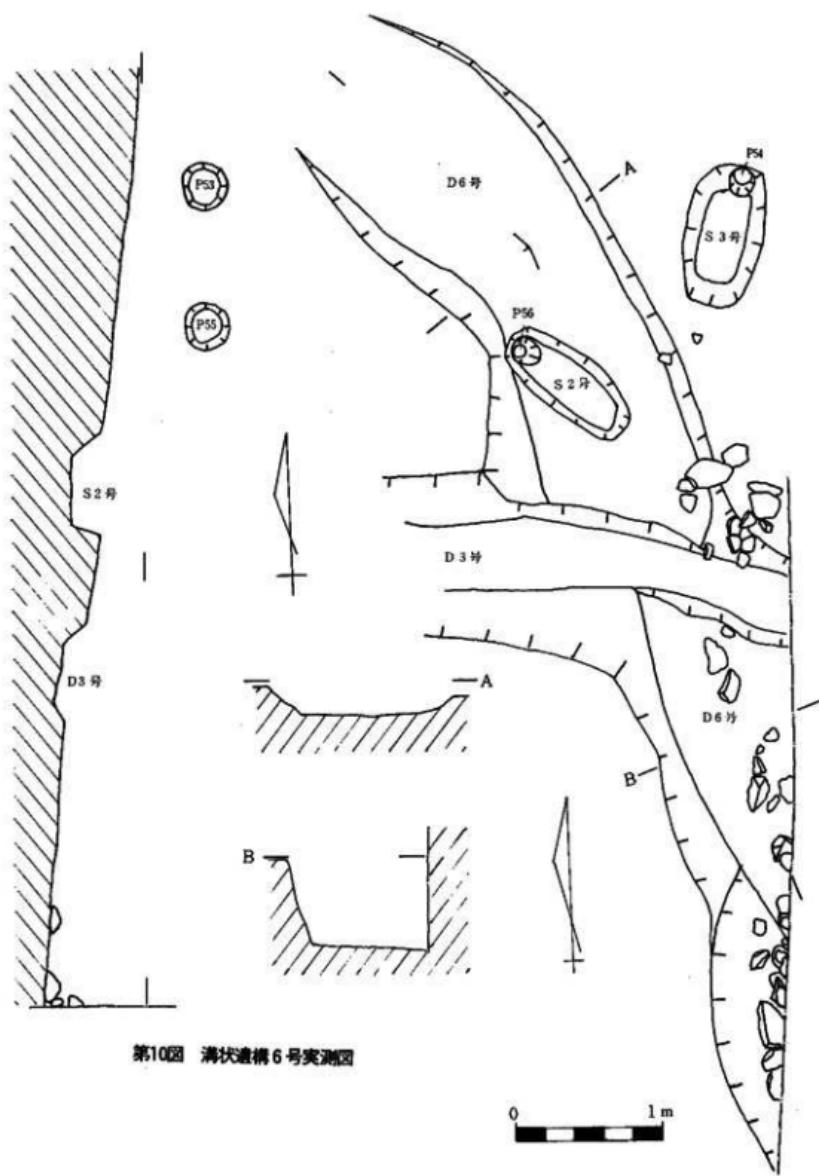


第8図 溝状造構 3号実測図



第9図 満状造構3号実測図

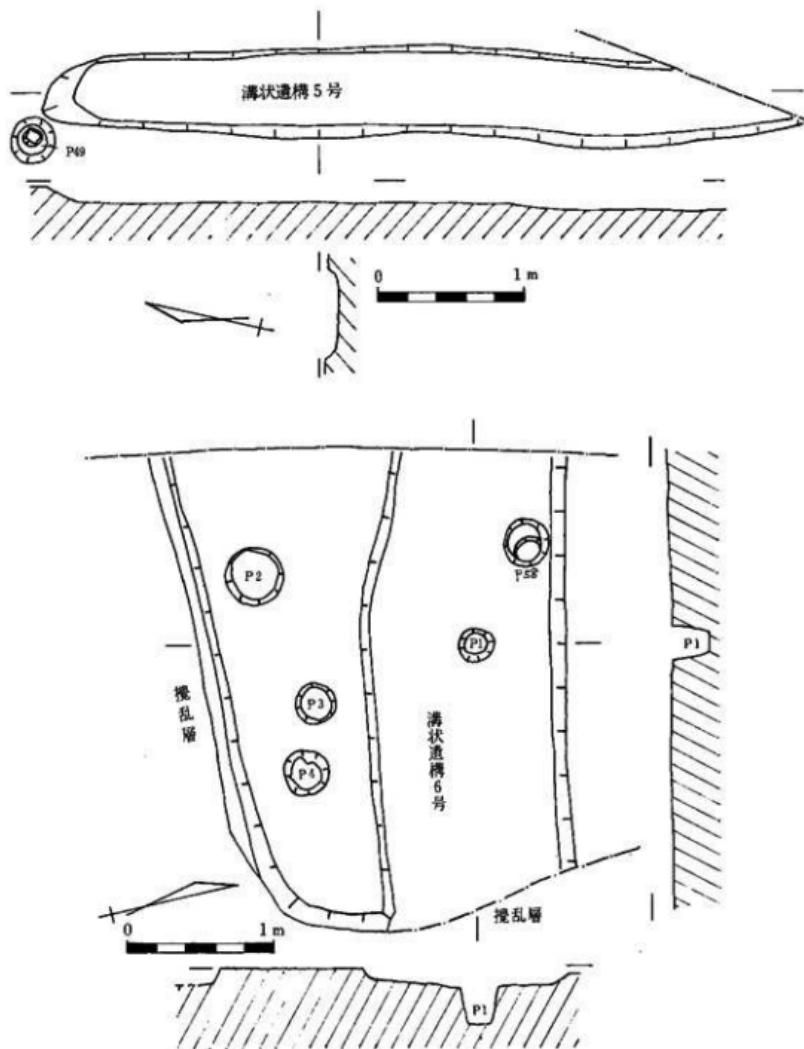




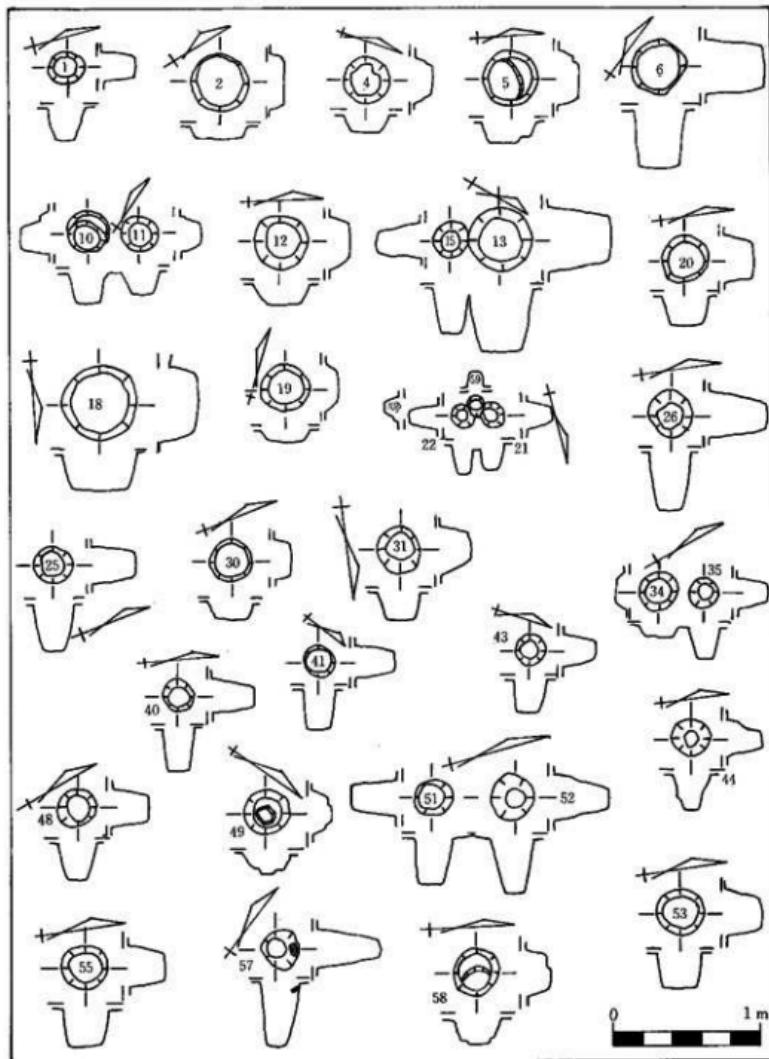
第10图 满状构造6号探测图

0 1 m

第11図 溝状遺構実測図（5号・7号）



第12図 柱穴実測図



2. 遺物

出土遺物は、表1に示すとおり総数305点出土している。主体をなすのは内136点の土師器類であり、器種は小片が大半を占めることから推察も加わるが、鉢・甕・壺・碗等で、特に环片が多くかった。

これらは、遺構内出土の遺物も含み投入・流入の物が多く、しかも完形品は石錘1個を除いて0点であり、さらに完形に近い遺物も極めて少なく、調査地が、前述したように諸事情の影響を受け、相当以上の擾乱層であったことを示している。

土師器以外には、縄文土器片6点、須恵器片17点、瓦片32点、陶磁器片109点、石器3点、鉄片2点が出土している。本文は、これを抽出し分類したものである。

(1) 縄文土器（第13図）

縄文土器は、本調査に於いて6点出土しているが、いづれも遺構伴出遺物ではなく、第Ⅳ層上位の黒色土等に混じて出土した。図番号1～3の3点は塞ノ神式土器、4～6は、小片の無文土器で判断しにくかった。

塞ノ神式土器は、縄文時代前期に位置づけられる土器で、口縁部が朝顔状に大きく外反し、種々の文様を有するが、中でも列点文（刺突文）の施文が特徴とされる。

1は、この特徴がよく現われた深鉢の頸部残片である。胴部は、わずかに内湾して立ち上がり、頸部から急曲して外反し口縁部となるが、口唇部は欠損して不明確である。4×6センチの片。

頸部には、隆起した突帯を横位に施し、さらにこの突帯文から胴部へ幾条も隆起突帯文が下向し、その間は凹線文となり、横位・縦位の突帯文に連続刺突文が施される。

2は、1と同様塞ノ神式土器と考査される頸部近くの深鉢胴部片で、内湾気味ではあるが直に立ち上がり、文様は、2.7×4.2センチの残片上辺に、横位の凹線文2条が認められ、さらに交叉する斜線刺突文が下向する。

3は、2の下方位胴部片と考査され、アンバランスの斜線刺突文が認められる。なお下方端は黒く焼けている。

4は、無文土器・鉢の胴部片で、直に立ち上がって頸部となり、急曲して外反するが口縁部は欠損し、口唇部等は詳らかでない。塞ノ神式土器とも考査されるが、小片のため詳らかではない。

5・6は深鉢の胴部片で、5は直に立ち上がり、6はわずかに内湾した立ち上がりを見せている。5は 3.7×4.3 センチ、6は 3.0×3.9 センチの片で、5は下方端が黒く焼けている。5・6とも無文土器である。

(2) 土師器 (第14図)

図番号7は、D3区に出土した広口壺の底部で、復元座付部径は6センチ、器高・口径は不明である。器面調整は、内外面ともヨコナデ。

座付部は、厚さ約1センチ、高さ0.4センチの低い高台となり、座付部から0.8センチ立ち上った位置に、鮮明な突起した陵が認められ胴部と区分し、胴部は大きく外反して斜上する。全体に肉薄に仕上げられ、焼成は良好である。

8と9は高台付土器の片で、底部も約半分を失し他は欠損している。器種は不明であるが一応広口壺とする。残存する片の器形は、高台が8・9とも外反しとともに八の字形に開いている。

復元高台際の径は8が6.3センチ、9が5.6センチ、座付径は8が6.8センチ、9が6.6センチである。器高・口径等は不明である。内面底部は平底で、8は端部がゆるく内湾して斜上するに比して、9は半月状に内湾して立ち上がる。

器面調整は、8が回転ナデで仕上げても良好である。ロクロ使用の調整痕も認められる。9は焼成があまく、回転ナデ等の調整痕は認められない。8・9とも肉薄に仕上げられている。

10は、高台付土器の片で焼成があまく、風化のため器面調整も鮮明ではない。器種も不明である。

11は、D3区に出土した前項土器同様の高台付土器底部片であるが、器高・口径は計測できない。復元高台際の径は5.8センチ、座付径6.1センチ、器種は壺と推定される。

高台は、や・八の字に開いているが、高台際から胴部にかけては急曲して開き、鮮明な陵を成したあと大きく内湾して立ち上がる。

内面の底部は、や・半月気味な盛り上がりを見せているが、端部からの胴部は急曲し内湾して立ち上がる。焼成は良好でロクロ使用による器面調整痕も鮮明に認められる。

12は、高台付土器の底部片であるが、小片のため、器種等は詳らかでない。

図番号13~21の9点は壺の底部片である。出土地・法量等は表3 土師器計測表に示している。

内15は、胴部外面に横位の凹線4条が認められ、鮮明に刻された回転施文と考察される。

底部は、風化し糸切り、ヘラ切り等は確認されない。

22は、一括出土の遺物で、碗と推定される土器の胴部片である。器高・口径等は計測できないが、容姿は、底部境から斜上し、内湾した立ち上がりをみせている。焼成は少しまく、器面調整はハケ目調整で内面はヨコナデ、外面は風化して詳らかでない。肉薄に仕上げられている。

23は、溝状造構3号内に出土した壺の胴部片である。器高・口径は計測できないが、器面は、内湾して立ち上がり頸部に達して終る片。胎土はこまかく、1~2ミリの砂粒を含み、全体が肉薄に仕上げられ、焼成は良好、ハケ目調整痕も鮮明で、内外面ともヨコナデである。

24は、壺の胴部片と推定される土器片で、肉薄に仕上げられ、内外面ともヨコにナデしているが、外面はハケ目によるナデである。

25は、縦4センチ・横5センチの、碗の胴部片である。下方の厚は約1センチ、上端は0.5センチの厚で、底部から斜上したのち内湾して立ち上がる。胎土はこまかく1ミリ程の砂粒を含み、仕上げ及び焼成は良好である。

器面調整は、回転ナデが鮮明に残され、外面に4条の陵と内面に2条の凹みが認められる。

26は、広口壺の頸部を含む3×3.6センチの胴部片で、器高・口径は計測できない。器面調整は風化のため鮮明でないが、内外面ともナデしている。頸部はゆるく内湾して立ち上がり、頸部からわずかに外反して口縁部となるが、口唇部は欠損のため不明確である。

胎土は少し荒く、1~3ミリの砂粒を含み、肉薄に仕上げられているが荒い感触を与える。焼成はや、あまい。

27は、E-2区に出土した広口壺の頸部を含む胴部片4.8×3.5センチの片である。器面調査は風化のため鮮明でないが、内外面ともヨコにナデ、頸部はゆるく内湾した立ち上がりをみせ、頸部からは直に立ち上がる。胎土はこまかく1~2ミリの砂粒を含み、仕上げは荒く焼成はあまい。

28は、D-1号に出土した広口壺の口縁部片で3.4×3センチの小片である。器面調整はハケ目で内外面ともヨコナデ、頸部から外反して立ち上がり、口唇部は内側が角張り、外側が丸味をおびた単純な口唇をもつ、胎土はこまかく、1~2ミリの砂粒を含み、焼成は良好である。

29・30・31の3点は布痕土器で、いづれも小片のため器種は詳らかでない。

29は、頸部下方の片で内湾して立ち上がり、内面は布目痕が鮮明、外面はヘラによる器面調整である。胎土はこまかく小砂粒を含み、焼成は良好である。

30も胴部片、内面は布目痕でゆるく内湾したあと外反し、再度内湾気味な立ち上がりをみ

せている。胎土は少し荒く1~3ミリの砂粒を含み、焼成はややあまい。

(3) 須恵器 (第15図)

須恵器は、表1に示すとおり17点と少量ではあるが出土している。しかし小片が多く法量計測のできる遺物は皆無である。本項では図番号32~43の12点を抽出して登載した。

器種は壺・壺等が多く、大半が格子目文様の叩き文であり、詳細は表4に示している。

32は、C-1区に出土した壺の胴部片である。器面調整は、外面が叩き目の格子目文で、内面は、ヘラ先による半円の調整痕が鮮明に認められる。容姿は、底部近くから大きく開き、内湾した立ち上がりをみせている。

胎土は、1ミリ程の砂粒を含み、外面は良好、内面は荒く仕上げられている。焼成は、やや良好の感じである。

33は、D-3号に出土した壺の胴部と推定される土器片で、厚味は1.5センチ、ゆるく内湾して立ち上がる。胎土はこまかく小砂粒を含み、器面は外面が叩き調整、内面はヨコナデ、焼成は良好である。

34は、D-1区出土の壺の胴部片で、容姿はゆるく内湾した立ち上がりをみせ、胎土はこまかく小砂粒を含み、器面は、外面が叩き目の格子目文、内面はヘラ先による横の波状調整痕が認められる。焼成は良好である。

36は、E-1区出土の遺物で、小片のため器種は詳らかでない胴部片である。容姿は、ゆるく内湾し肉薄に仕上げられている。胎土はこまかく小砂粒を含み、器面は、外面が格子目文、内面は、かすかに青海波文が認められる。焼成は良好である。

37は、E-3区に出土した遺物で、壺と推定される胴部片、肉薄の胴部はゆるく内湾して立ち上がり、胎土はこまかく小砂粒を含み、器面は、外面が格子目文、内面はヘラ先によって無雑作に仕上げられている。焼成は少しあまい。

38は、E-2区に出土し、小片のため器種は詳らかでないが、底面からの立ち上がり等から壺の胴部片と推定した。容姿は、ゆるく内湾して立ち上がり、胎土はこまかく小砂粒を含み、器面は、外面が格子目文、内面はヘラ調整。焼成はあまい。

40は、D-3区に出土した遺物で、37同様である。

41は、C-1区に出土した壺の胴部片で、下方に底部の一部が残存する。器面は、外面がヨコにナデで2条の凹みが横位に認められる。内面は、回転による調整痕が鮮明で、8条のアンバランスの突帯状線が認められ、その間は大小に凹んだ波状となっている。

容姿は、詳らかでないが平底と想定され、底部端から急曲してや・斜上し、ゆるく内湾して立ち上がる。胎土はこまかく良質で、1~2ミリの砂粒を含み、焼成は良好である。

42は、D-6号に出土した壺の胴部片である。器面は外面がヨコナデ、内面は、回転によるハケ目痕が鮮明であり、波状の凹みと陵が3条横位する。

容姿は、肉薄の下方から内湾して立ち上がり、上端はや・肉厚となって頸部に至る。胎土はこまかく良質で小砂粒を含み、焼成は良好である。

43は、D-3号出土の碗の胴部片である。器面は、内外面とも回転調整痕が鮮明で、ハケ目が横位に走り波状に調整される。

容姿は、底部にヘラ切りのふくらみが認められ、ゆるく内湾したあと外反して口縁部となり、口唇は丸くおさめられている。胎土はこまかく小砂粒を含み、焼成は良好である。

(4) 瓦器・瓦 (第16図)

図番号44は、D-1区に小片として出土し接合した瓦器の片である。器種については、径20センチ内外の盤と推定されるが、わずかに内湾し、さらに端部に蓋縁も認められることから、蓋片と推察される。器高・口径は詳らかでない。

約7.5×約12.0センチ、厚さ0.5センチと肉薄の瓦器片は、表面をナデ裏面はハケでヨコナデ、焼成は良好である。

図番号45~63は瓦片である。内45~55は平瓦、56~63は半丸瓦である。出土地・色調等については、表6瓦計測表に示している。

平瓦のうち、45~51の7点は表面に布目文が認められ、裏面は46・47が無文、他は横位の粗い繩目叩き文で調整される。器厚は、端片のためか、全体的にや・薄く感じられる。46は、のし瓦とも考察される。51は須恵質に焼成されている。

52は、表裏面とも横位の粗い繩目叩きの調整で、器厚は約2センチ、焼成はや・あまい。

53は、表面が無文でヘラナデ、裏面は横位の繩目叩き文である。器厚は薄く、平瓦端部の片である。焼成はや・あまい。

54は、表面にかすかな布目痕を残し、さらに器物によって横位にナデ、裏面は繩目叩き文である。器厚は、端部が約1.5センチ、中央寄り破損部は2.7センチで厚味を増している。

55~63の8点は半丸瓦の片である。内56は雁振瓦、61・62は、のし瓦とも考察されるが詳らかでないため、半丸瓦に含めたものである。

56・57・58・59・60は、表面が無文、裏面は布目文様が鮮明である。61・62・63は、表面

が無文、裏面は、ヘラ等の器材による斜線状の調整痕が鮮明である。

焼成は、56・57・59・63が硬目に焼成され、他は、や、硬目ではあるが前者に比すると少しあまい。

(5) 陶磁器（第17～21図）

陶磁器は、本調査に於いて表1に示すとおり、少量ではあるが62点出土している。これらの遺物は大半が小片として出土し、類似する遺物も多いことから、白磁5点、青磁3点、磁器5点、染付13点、陶器16点、計42点を抽出して登載した。

白磁は、図番号64～68を第17図・表7にまとめている。17～18世紀以降の遺物と考察される。

青磁は、本調査に於いて僅少の3点が出土し、図番号69～71を第18図・表8にまとめている。白磁同様17～18世紀以降の遺物と考察される。

磁器は8点出土しているが、類似する遺物は除き、図番号72～76を抽出し、第19図・表9にまとめている。近世以降の遺物である。

染付は、陶磁器中最多の47点が出土しているが、図番号77～89の13点を抽出し、第20図・表10にまとめた。近世以降の遺物である。他は模様等も共通することから図示しなかった。

陶器は、染付に次いで41点が出土している。図番号90～106の16点を抽出し、第21図・表11にまとめている。近世以降の遺物である。

以上陶磁器は、大半が小片として出土し、出土地層も比較的地表面に近い層位、もしくは、擾乱・埋土層に混じての出土で、造構の伴出遺物と認められるものはなかった。

(6) 石器・鉄片（第22図）

石器類は、石斧がE2区に1点、石錐がC1区に1点、敲石がE1区に1点、計3点が調査地の南辺に片寄って出土している。しかし、検出遺構に伴ったものではなく、いづれも調査地外から流入した遺物と考察される。

図番号106の石斧は、石材が黄岩製で頸部近くで折損し頭部を滅失している。打製石斧で、出土層は表土内である。

図番号107は石錐で、第Ⅲ層位の二次堆積土に混じて出土している。石材は黄岩製で、やや小判形をした原石の両先端を打ち欠いでいる。

図番号108の敲石は、調査地南辺区の西隅から、上層位の土層に混じて出土している。略円形状を呈した砂岩製で、法量は径8.2×8.2センチ、厚さ6.7センチの円形であるが、底面は径3センチ程や、平面状を呈している。

本調査に於いて、石器類同様鉄片も2点と僅少な出土であった。図番号109・110の鉄片は、小石を含んだ溶解鉄の小片であることから、鐵冶滓と認められる。

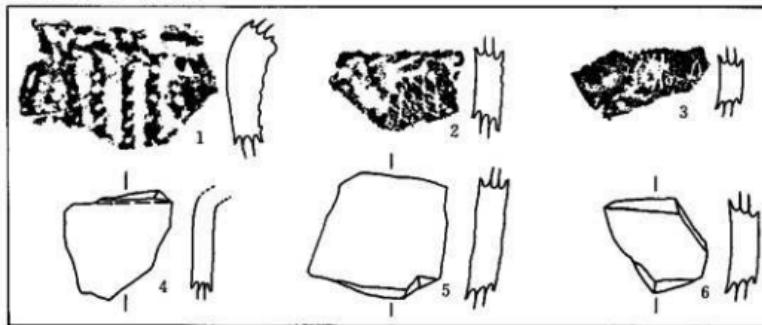
以上、遺構と遺物について簡略に述べてきたが、遺構や柱穴は調査地の南辺に片寄って検出され、伴出遺物と認める遺物は僅少なものであった。

特に、溝状遺構3号は大型溝に類する溝と考察され、西方から東方の台地縁辺部に向って直に貢流し、古代寺院に関係した遺構とも考察された。しかし北側壁の上層は滅失し、出土遺物も流入遺物であったことから確認するにはいたらなかった。

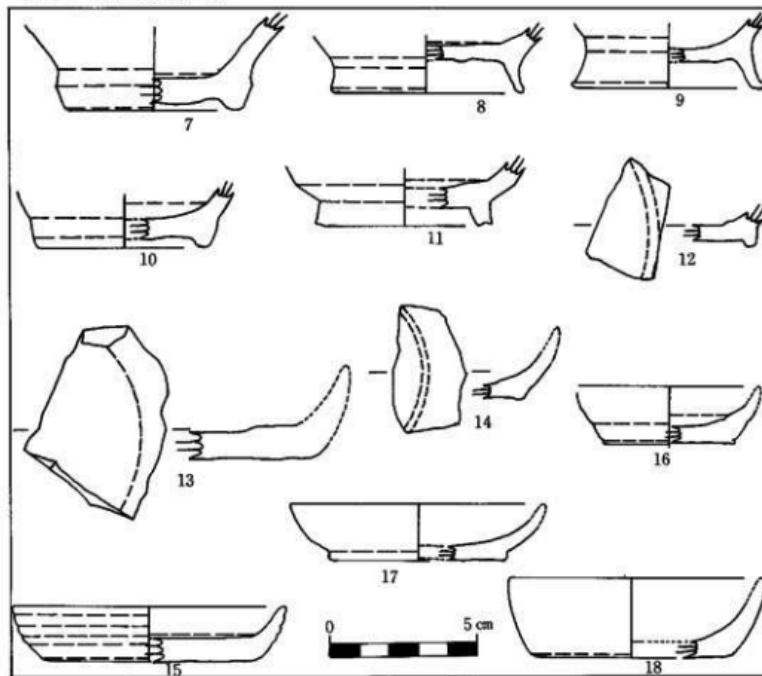
遺物については、総計305点が出土しているが、主体をなすのは土師器であり、調査地に近接した古墳に關連する遺物は少なく、時代を下った。糸切り・ヘラ切り底の坏片が大半を占めていた。

しかし、奈良・平安時代の古代寺院跡は検出されなかつたが、当時代の遺物と考察される布目瓦等の瓦片32点が出土したことは、今後の調査研究にとって、貴重な参考資料に供されるであろう。

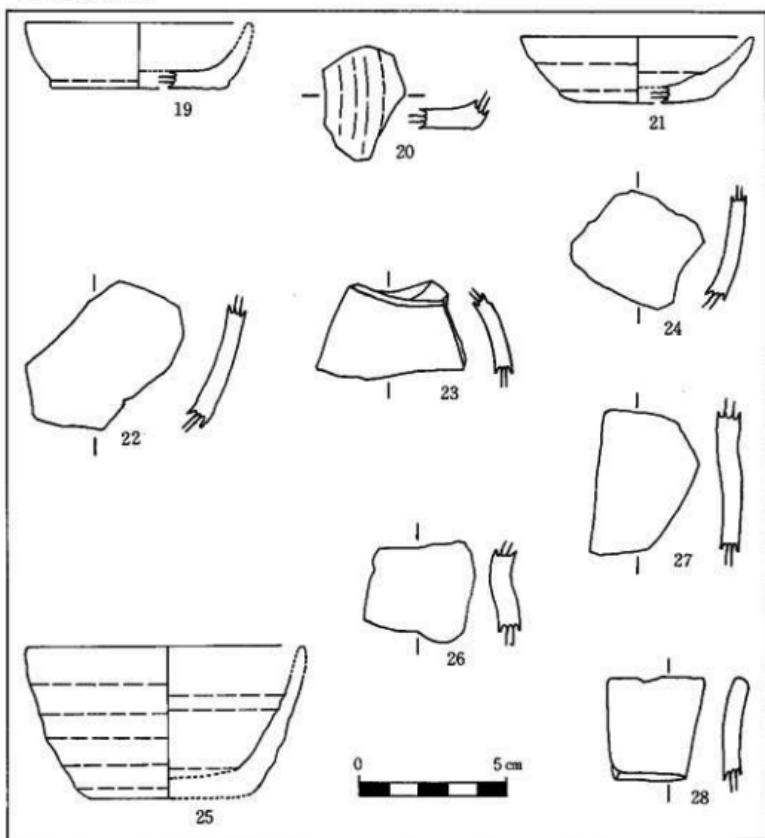
第13図 純文土器実測図



第14図 土師器実測図 (1)



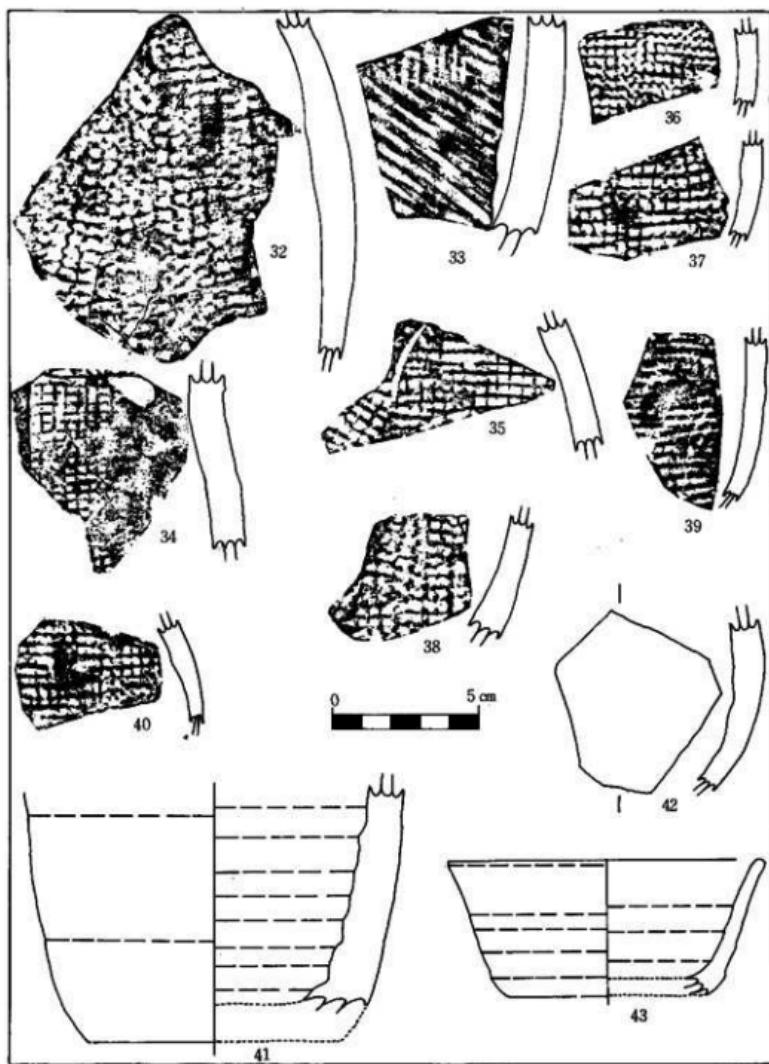
土師器実測図(2)



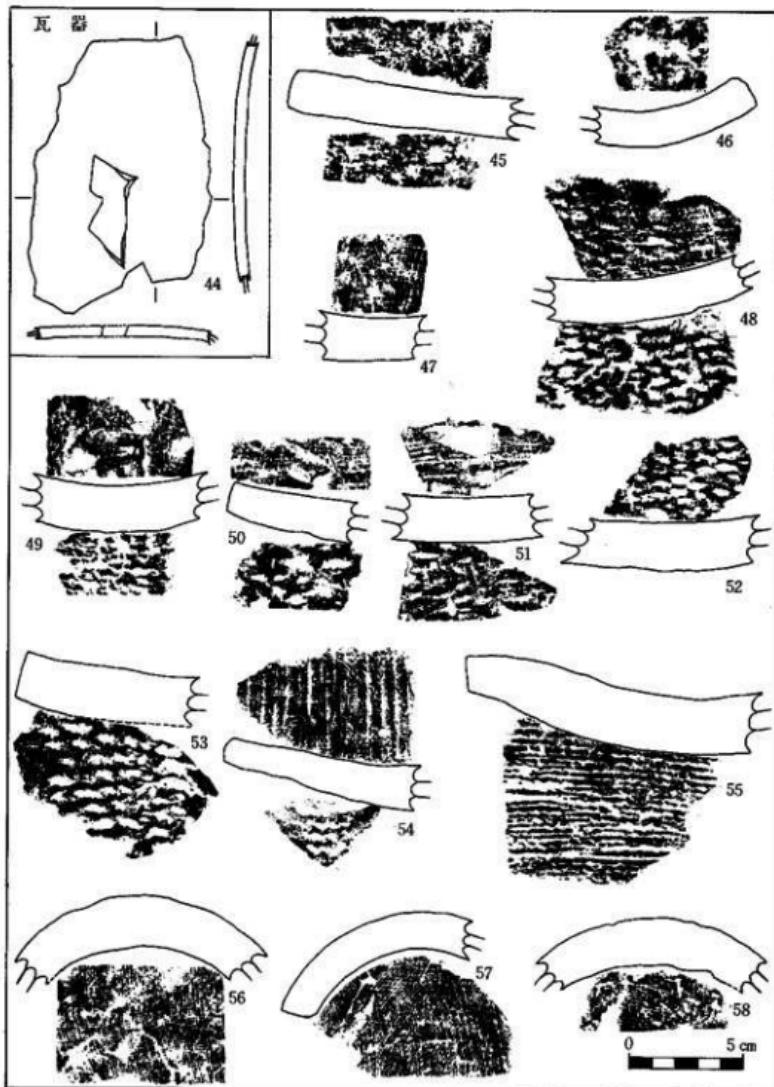
布痕土器



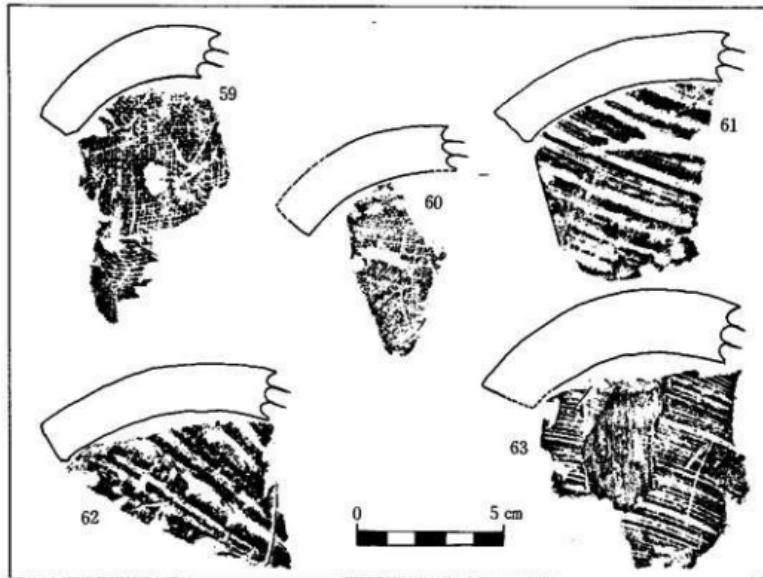
第15図 痘瘍器実測図



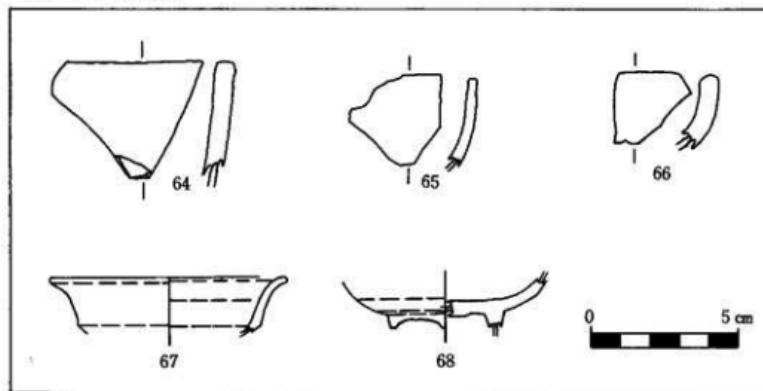
第16図 瓦実測図(1~2)



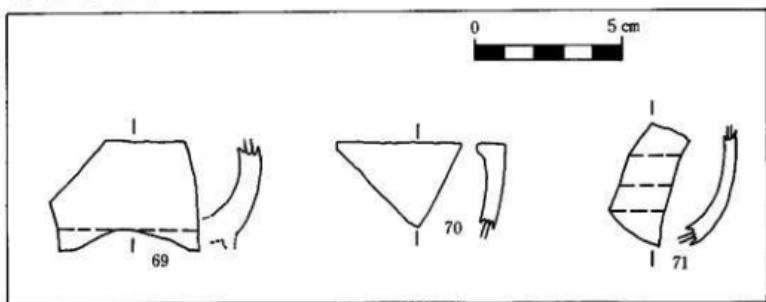
瓦実測図(2)



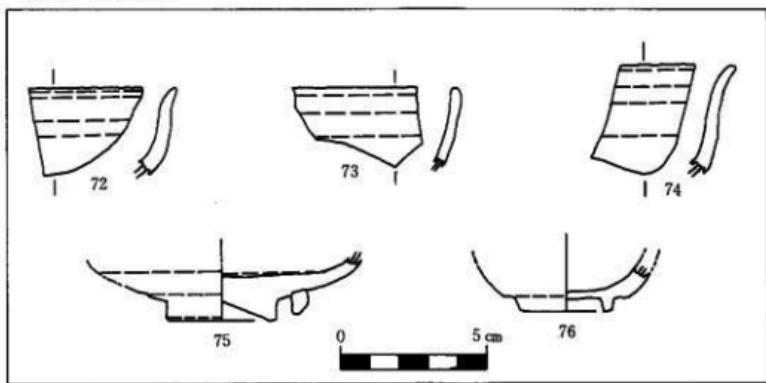
第17図 白磁実測図



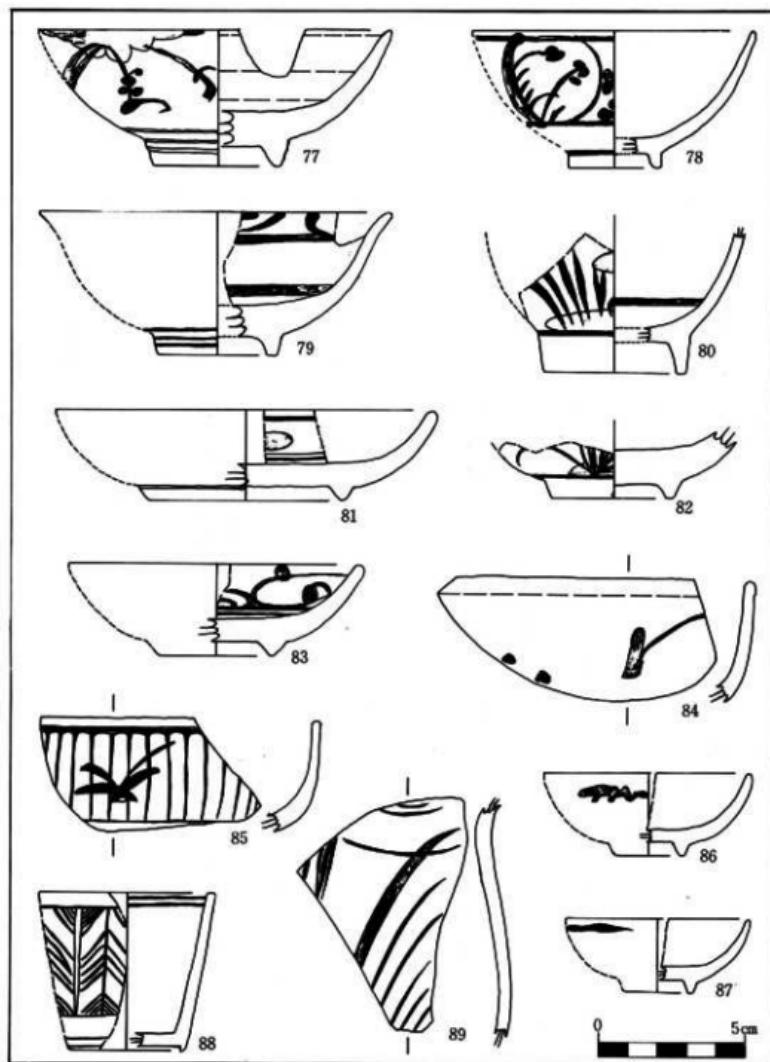
第18図 青斑実測図



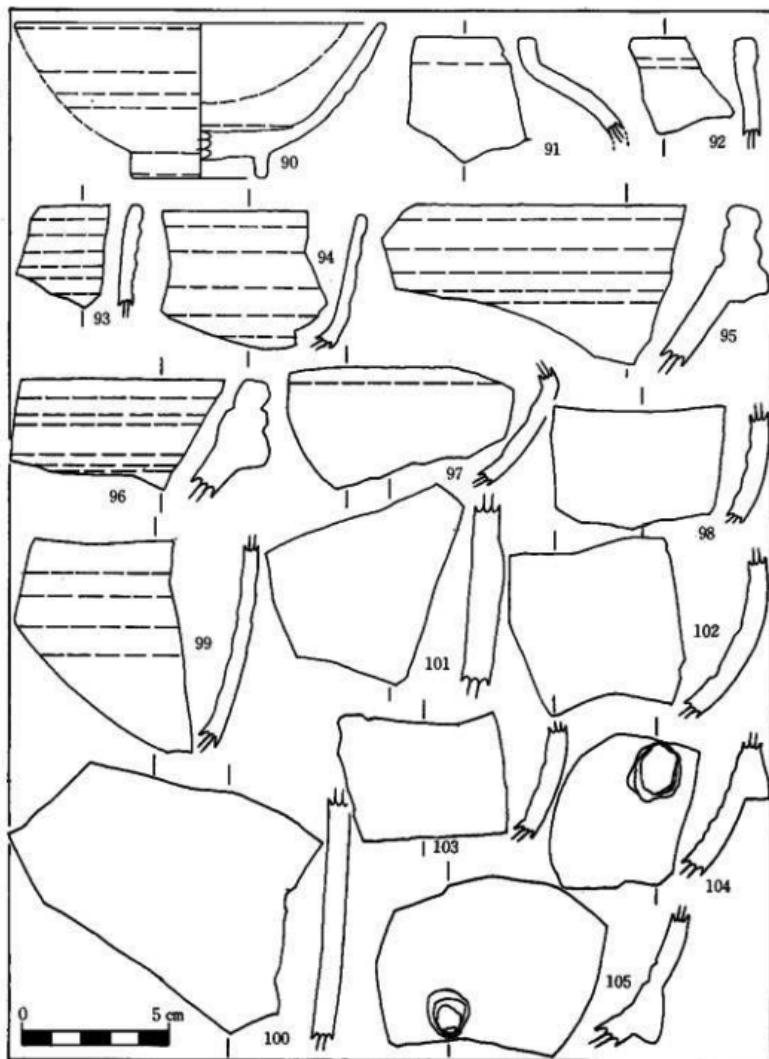
第19図 磁器実測図



第20図 染付実測図



第21図 陶器実測図



第22図 石器・鉄片実測図

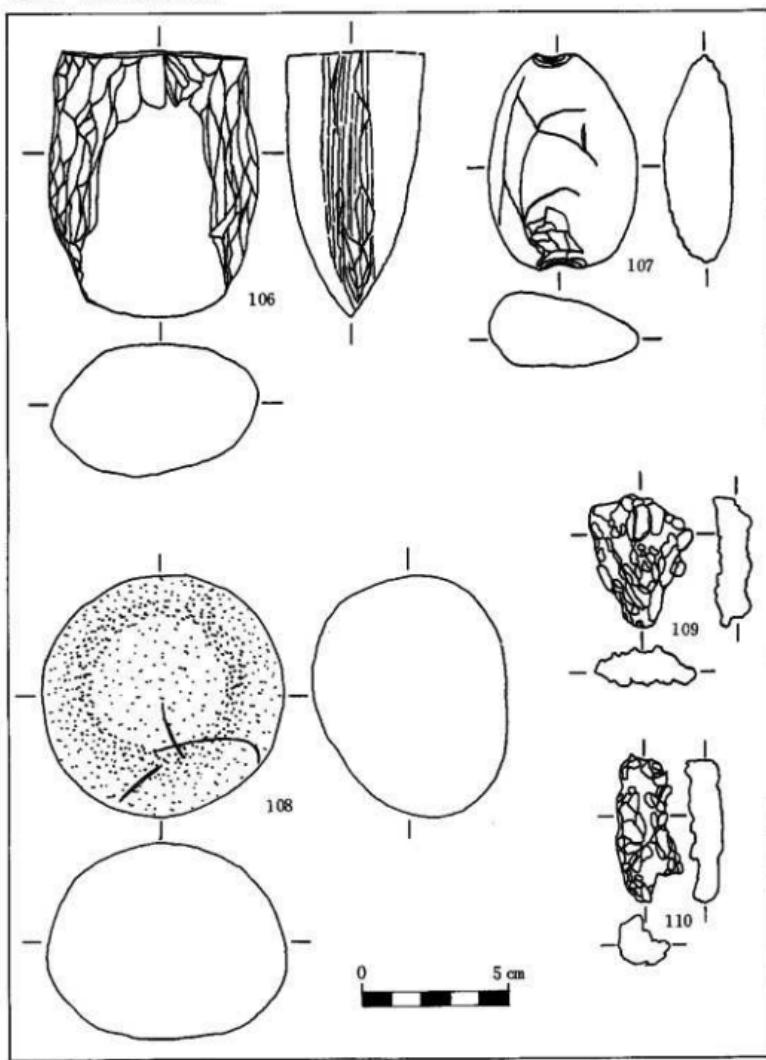


表1

出土遺物一覧表

出土地 遺物名	C-1区	C-2区	C-3区	D-1区	D-2区	D-3区	E-1区	E-2区	E-3区	計
縄文土器			1			3			2	6
土師器			8	15	19	31	18	23	15	129
須恵器	4			1	1	7	1	1	2	17
布痕土器			2			2				4
瓦器				3						3
瓦	5			5	7	3	5	4	3	32
白磁				2	1			4	3	10
青磁					1	1			1	3
磁器				5	2			1		8
染付		10		7	8	4	3	10	5	47
陶器	2		2	5	18		4	7	3	41
石器								(石斧)		1
石錐	1									1
敲高							1			1
鉄片	2									2
計	14	10	13	43	57	51	32	51	34	305

表2

縄文土器計測表(第13回)

単位:cm

図番号	器種	法量	色調	胎 土	焼成	出土地	備 考
1	鉢		外・明褐色 内・浅黄橙	こまかい。雲母を含む 1ミリ程の粒子	良 好	D-5号	口縁部片 塞ノ神武土器
2	鉢		外・橙 内・にぶい橙	こまかい。雲母を含む 1ミリ程の粒子	良 好	D-3区	頸部近くの洞部片 塞ノ式土器
3	鉢		外・橙 内・にぶい橙	同 上	良 好	D-3区	底部近くの洞部片 塞ノ神式・外面に縁付着
4	鉢		外・橙 内・橙	同 上	良 好	C-3区	頸部近くの片 無文土器
5	鉢		外・にぶい橙 内・橙	少し荒い。雲母を含む 1ミリ程の粒子	良 好	E-3区	洞部下方の片 無文土器
6	鉢		外・にぶい橙 内・にぶい橙	同 上	良 好	D-3区	洞部片 無文土器

表3

土器計測表(第14回) 1

単位:cm

図番号	器種	法量	色調	胎 土	焼成	出土品	備 考
7	広口壺		外・橙 内・にぶい橙	こまかい 小粒子を含む	良 好	D-3区	底部洞部片
8			外・にぶい橙 内・浅黄橙	こまかい 小粒子を含む	良 好	D-3区	底部洞部片 高台付土器
9			外・浅黄橙 内・黄橙	同 上	ややあまい	D-1区	同上・高台付土器片
10			外・橙 内・橙	同 上	あまい	一 括	同上・高台付土器片
11	壺		外・灰白 内・明褐色	少し荒い 小粒子を含む	良 好	D-3区	同上・高台付土器片
12			外・橙 内・浅黄橙	こまかい 小粒子を含む	ややあまい	一 括	底部片
13	壺		外・にぶい橙 内・橙	同 上	良 好	一 括	底部片
14	壺		外・橙 内・橙	少し荒い 小粒子を含む	あまい	一 括	底部洞部片
15	壺		外・明褐色 内・浅黄橙	こまかい 小粒子を含む	良 好	D-3区	底部洞部片 洞部に4条の凹線が鮮明
16	壺		外・橙 内・にぶい橙	同 上	良 好	D-3区	底部洞部片 底面ヘラ切り

土師器計測表(第14図) 2

単位: cm

図番号	器種	法量	色 調	胎 土	焼 成	出土地	備 考
17	壺		外・浅黄橙 内・浅黄橙	こまかい 小粒子を含む	やや良好	E-2区	底部・胴部片 底面ヘラ切り
18	壺		外・浅黄橙 内・浅黄橙	同 上	ややあまい	一括	同 上
19	壺		外・にぶい橙 内・橙	同 上	やや良好	一括	同 上
20	壺		外・浅黄橙 内・浅黄橙	同 上	ややあまい	一括	底部・胴部片 底面未切り痕あり
21	壺		外・浅黄橙 内・浅黄橙	同 上	良好	一括	底部・胴部片 底面ヘラ切り
22	碗		外・浅黄橙 内・浅黄橙	こまかい 1~2ミリの粒子	やや良好	一括	胴部片
23	壺		外・浅黄橙 内・橙	こまかい 1~2ミリの粒子	良好	D-3号	底部近くの胴部片
24	錫壺		外・にぶい橙 内・浅黄橙	少し荒い 1~2ミリの粒子	良好	一括	胴部片
25	碗		外・にぶい橙 内・にぶい橙	こまかい 小粒子を含む	良好	一括	胴部片
26	広口壺		外・にぶい橙 内・浅黄橙	少し荒い 1~3ミリの粒子	ややあまい	一括	頸部近くの胴部片
27	広口壺		外・橙 内・橙	こまかい 小粒子を含む	あまい	E-2区	胴部片
28	広口壺		外・浅黄橙 内・にぶい橙	同 上	良好	D-1号	口縁部片
29	鉢		外・浅黄橙 内・橙	こまかい 小粒子を含む	良好	D-6号	布痕土器
30	鉢		外・橙 内・橙	少し荒い 1~3ミリの粒子	ややあまい	一括	布痕土器
31	鉢		外・橙 内・橙	少し荒い 1~2ミリの粒子	ややあまい	一括	布痕土器

表4

須恵器計測表(第15図)

単位:cm

図番号	器種	法量	色調	胎土	焼成	出土地	備考
32	甕		外・褐灰 内・灰白	こまかい。良質 小粒子を含む	やや良好	C-1区	腹部片、外面格子目文 内面ヘラヨナデ
33	●甕		外・褐灰 内・褐灰	同上	良好	D-3号	腹部片、外面格子目文 内面ヘラヨナデ
34	甕		外・褐灰 内・褐灰	こまかい 1~2ミリ粒子	良好	D-3区	腹部近く鰐部片 外面格子目文、内面ヨコナデ
35	甕		外・褐灰 内・灰白	こまかい。良質 小粒子を含む	良好	D-1区	腹部片、外面格子目文 内面ヘラヨナデ
36			外・褐灰 内・黄灰	こまかい。 小粒子を含む	良好	E-1区	腹部片、外面格子目文 内面青海波文
37	●甕		外・灰白 内・灰白	同上	ややあまい	一括	腹部片、外面格子目文 内面ヘラナデ
38	●甕		外・灰白 内・黄灰	同上	あまい	E-2区	同上
39			外・浅黄 内・浅黄	同上	あまい	一括	腹部片、外面格子目文 内面青海波文
40	●甕		外・灰黄 内・灰白	少し荒い 小粒子を含む	ややあまい	一括	腹部片、外面格子目文 内面ヘラナデ
41	壺		外・黄灰 内・灰白	こまかい。良質 1~2ミリ粒子	良好	C-1区	底部付近の鰐部片 外面ヨコナデ、内面回転ナデ
42	壺		外・黄灰 内・灰白	こまかい。良質 小粒子を含む	良好	D-6号	鰐部片 同上
43	碗		外・黄灰 内・黄灰	同上	良好	D-3号	鰐部片 外面内面とも回転ナデ

表5

瓦器計測表(第16図)

単位:cm

図番号	器種	法量	色調	胎土	焼成	出土地	備考
44			外・にぶい橙 内・にぶい褐	こまかい 1ミリ程の小粒子	良好	D-3号	径20cm内外の蓋片 外面ナデ、内面ヨコナデ

表6

瓦 (第16図)

図番号	器種	色調	焼成	出土地	備考
45	平瓦	表灰 裏灰 白 白	あまい	D-1区	表面は布地目文、裏面は繩目叩き文
46	平瓦	表灰 裏灰 白 白	あまい	E-3区	表面、布地目文 裏面、無文、のし瓦片とも推察される
47	平瓦	表浅 裏浅 黄 黄	あまい	E-2区	表面、布地目文 裏面、無文
48	平瓦	表灰 裏灰 白 白	やや良好	E-2区	表面、荒目の布地文上に繩目叩きの施文 裏面、繩目叩き文
49	平瓦	表灰 裏灰 白 白	やや良好	C-1区	表面、布目文上に親指の指紋1点付着 裏面、繩目叩き文
50	平瓦	表灰 裏灰 白 白	やや良好	C-1区	表面、荒目の布地目文 裏面、繩目叩き文
51	平瓦	表黄 裏黄 灰 灰	良 好	D-3号	表面は布地目文、裏面繩目叩き文 須恵器質気味の焼成
52	平瓦	表灰 裏灰 白 白	ややあまい	D-3号	表裏面とも繩目叩き文
53	平瓦	表浅 裏浅 黄 黄	ややあまい	E-1区	表面無文、裏面繩目叩き文
54	平瓦	表浅 裏灰 黄 白	ややあまい	D-7号	表面、布目痕を残し器材による横位ナデ 裏面、繩目叩き文であるが大半は欠損
55	平瓦	表浅 裏灰 黄 白	良 好	D-2区	表面は無文、裏面は燃糸調整様の細い 繩目の叩き文
56	半丸瓦	表黄 裏灰 黄 黄	良 好	D-1区	表面は無文、裏面は細目の布地目文。 雁振の片とも推察される。
57	半丸瓦	表黄 裏灰 黄 黄	良 好	D-6号	表面無文、裏面布地目文
58	半丸瓦	表浅黄橙 裏浅黄橙	やや良好	E-2区	表面無文、裏面布地目文
59	半丸瓦	表灰 裏灰 白 白	良 好	D-1区	表面無文、裏面布地目文
60	半丸瓦	表灰 裏灰 白 白	やや良好	D-3区	表面無文、裏面布地目文
61	半丸瓦	表浅黄橙 裏浅黄橙	やや良好	P-57号	表面無文、裏面は器物による斜状調整 のし瓦片とも推定される
62	半丸瓦	表浅黄橙 裏浅黄橙	やや良好	D-6号	表面無文、裏面は器物による横位調整 のし瓦片とも推定される
63	半丸瓦	表灰 裏褐 白 灰	良 好	D-3号	表面無文、裏面は器物による斜状調整 表面の仕上げは荒い

※45-55平瓦片・56-63半丸瓦片。

表7 白 磁 (第17図)

図番号	器種	出土地	備 考
64	鉢	E-2区	口縁部を含む胴部片、口唇は角張っている。
65	碗	D-1区	口縁部を含む胴部片、口唇は丸くわずかに内側へ張り出す。外面に回転調整痕を示す横位の陸3条がかすかに認められる。
66	碗	一括	口縁部を含む胴部片。胴部は内湾して立ち上がり口唇は丸く仕上げられている。
67	浅鉢	D-3号	口縁部を含む胴部片、底部から急曲して立ち上がり頸部付近より大きく外反する。肉薄に仕上げられている。
68	皿	E-2区	高台を含む底部片、高台は4つの突出を成したもの。平底の端部はゆるく内湾する。外面に陸が認められる。

表8 青 磁 (第18図)

図番号	器種	出土地	備 考
69	碗	D-3区	高台際の一部を残す胴部片。大きく内湾して立ち上がる。外外面とも厚味に施釉される。
70	鉢	D-3区	口縁部胴部片。胴は直に立ち上がり口縁部は角張ってまとめられ、内側に張り出している。外外面薄く施釉される。
71	碗	E-3区	胴部片。大きく内湾して立ち上がる。外面に3条の陸が認められる。外外面とも薄く施釉される。

表9 磁 器 (第19図)

図番号	器種	出土地	備 考
72	碗	D-1区	口縁部胴部片。胴部は内湾して立ち上がり、上縁近くから外反して口縁部となる。口唇は尖頭様に丸くおさめてある。
73	鉢	D-1区	口縁部、胴部片は直に立ち上がり口縁近くで厚みを増す。口唇は丸くおさめ、胴部に回転調整痕を残す。
74	鉢	E-2区	口縁部胴部片、胴部はゆるく内湾し頸部から外反する。口唇は丸くおさめ、外面に回転調整痕を残す。
75	皿	D-2区	底部片、高台際の外側に器を支える紐状の突出3個が認められる。高台は茶、胴部は浅黄色に施釉される。
76	碗	D-2区	底部胴部片、高台際から横に0.5センチ進み、急曲し内湾して立ち上がる。高台内は平底で薄く、胴部はやや肉厚となる。

表10

染付(第20図)

図番号	器種	出土地	備考
77	碗	D-4号	器高4.7cm、口徑 ^{12.0} cm 器を中央で切半した片、底部肉厚胴部は徐々に肉薄となる。
78	碗	D-3号	器高4.7cm、口徑 ^{9.7} cm 高台から口縁部までの片。 胴は半円状に内湾する。口縁部は尖頭状にまとめる。
79	碗	D-3号	器高4.9cm、口徑 ^{12.0} cm、 高台から口縁部までの片。 胴部は内湾して立ち上がり、口縁近くから外反する。
80	碗	D-2区	高台の一部を残す胴部片、高台内は深い。
81	皿	D-1区	器高3.1cm、口徑 ^{13.0} cm、 高台から口縁部にかけた片。 平底、胴は内湾して立ち上がる。高台は三角状で産付部が尖る。
82	碗	D-1区	底部片、内面中央がわずかに高く、底部胴部の境なく内湾する。 肉厚であるが胴部は徐々に内薄となると推定される。
83	皿	D-1区	器高3.2cm、口徑 ^{10.1} cm、 高台から口縁部にかけた片。 平底で三角状の高台を有し内湾して立ち上がる。口縁は丸い。
84	碗	D-2区	口縁部を含む胴部片。胴部は内湾して立ち上がり、口縁部近くに 頭部を思わせる凹み段が認められる。口縁は丸い。
85	碗	D-3区	口縁部を含む胴部片。胴は下方が大きく上方がゆるく内湾して立 ち上がる。口縁は角状に見えるが丸くおさめられている。
86	碗	C-2区	器高2.8cm、口徑 ^{7.1} cm、 高台から口縁部にかけた片。 高台際は丸目胴部は大きく内湾する。大きな盃とも推定される。
87	碗	E-2区	器高2.5cm、口徑 ^{6.3} cm 高台際はやや角張り胴は大きく内湾する。大盃とも推定される。
88	鉢	E-3区	器高5.4cm、口徑 ^{6.1} cm、底は平底でわずかに突出する 高台を持ち、胴は直に立ち上がり口縁は角張っている。
89	瓶	S-1号	頸部胴部片、胴はやや大きく内湾して立ち上がり、頭部は外反 するが口縁部は欠損のため不明。下方は肉薄となる。

表11

陶 器 (第21図)

図書号	器種	出土地	備 考
90	碗	D-1区	器高5.3cm、口径約12.7cm、外面は高台際からゆるく内湾して立ち上がる。内面は底面端が段状となり斜上し、口縁は丸くおさめである。
91	壺	E-1区	口縁部から胴部にかけた片である。外面は淡黒色の施釉。胴はゆるく内湾し、頸部は急曲して口縁部となる。口縁は方形状
92	鉢	D-3号	口縁部胴部片。外面黒褐色の施釉。胴部は内湾気味に立ち上がり頸部を思わせるふくらみとなって内湾する口縁部となる。
93	鉢	E-1区	口縁を含む胴部片。内外面とも褐色の施釉。内面は斜線外面はヨコ線状の紋様をなす。口縁は丸くおさめられている。
94	碗	D-2区	口縁を含む胴部片。内外面とも釉をかけ回転調整のナデ痕が数条認められる。内面は条痕なし。
95	擂鉢	D-3号	口縁部の片。胴は直に立ち上がり頸部は横に1.1cm張り出してのち、2条の凹み線を持って直上する口縁部となる。内面は凹線が斜上する。
96	擂鉢	D-3号	口縁部片頸部から横に1.8cm張り出し、2条の凹みと陵を有して直上する口縁部となる。内面にも1条の凹み線が口縁部にある。
97	壺	D-2区	胴部片。茶褐色の施釉(外面)。胴は内湾して立ち上がり上端で急曲し内向する。そのあと頸部に達すると推定されるが欠損している。
98	壺	D-1区	胴部片。胴部は大きく内湾して立ち上がるが、上・下とも欠損し底部頸部等は詳らかでない。外面に黒褐色、内面に茶色の施釉。
99	壺	C-3区	胴部片。胴部下方の片と推定され、下方が大きく上方がゆるく内湾して立ち上がる。外内面黄色の施釉と回転調整痕を残す。
100	壺	E-3区	胴部片。外内面に茶色の釉をかける。外面に黒色の釉が縦に1条流れている。
101	壺	E-2区	胴部片、外面に薄茶、内面に浅黄の釉をかけている。外面上方が急に肉薄となり、黒色釉が縦に1条流れている。
102	壺	D-2区	胴部片。胴部は大きく内湾して立ち上がる。外面には釉をかけ下方には煤が付着する。内面は荒い調整痕数条が認められる。
103	壺	D-3号	胴部片、102号遺物と同様遺物である。外面には釉をかけ片の全面に煤が付着する。内面は4条の回転調整痕が認められる。
104	壺	D-3号	耳付き壺の片で、片の上端に1個突出した部位を認める。調整は回転によるハケ目痕が鮮明であり、内面はさらに凹凸状となっている。
105	壺	D-3号	胴部下方の片。下方に紐状の突起1個が認められる(器を3点の突出によって安定させる)。外内面に施釉、外面には煤が付着する。

III. ま と め

このたび実施した諏訪遺跡の発掘調査は、前項でも述べたとおり、県立妻高等学校の敷地内に、同校聖陵会の聖陵会館を建設するということで初められた。

同校敷地の西側は、古墳群が点在する西部原台地の南端部であり、舌状丘陵が屏風様に壁立ちし、東側は、急落して西部平野や妻市街が一望できる。

このような、歴史的にも風光明媚な中間台地に旧制妻中学校が建設され、多くの学徒を世に送り出してきた。またこの地は、古くから日向国分尼寺跡と語り継がれてきた場所でもある。

国分寺建立は、周知の如く天平13年（741）の詔によって始まるが、天平19年（747）には、各國に國分寺建立を督励する詔も發せられていることから、全国的にみて、寺院建立の大業は、大いに遅れていたことを示している。

この督励の中には、むつかしい寺地選定の条項も次のように加わっていたようだ。

それは、国華として仰ぎ見れる良好な地形であること。水害等の憂いがない安全な場所。人家等の雜踏地から離れた位置であること。人が集まるのに便利が良いところ。國府に近い位置にあるということ。条里区画に拘束を受けるが容易であること。南に面した土地であること等であった。

以上のお好条件を備えて建立された日向国分寺、同寺に近接して建立された日向國分尼寺は、跡地も推論の域を脱していないのが実情である。

現妻高等学校の敷地が、仮に日向國分尼寺跡とするならば、前述のお好条件を最も満した寺地だったということができる。

全国的な通例として、国分寺の寺地は凡そ2町四方（1町は109m）、國分尼寺の寺地は1町四方が標準的なものとされている。しかしこの件に関しては、地形上の制約等により、必ずしも方形形状の寺地とは限っていない。

また国分寺は、南門・中門・金堂・講堂が、南北線上に並ぶのが通例であるが、地形によっては塔と金堂の配置によって、全体の配列も異なる例も見受けられている。

なお、全国的に國分寺跡の調査は進んでいるが、國分尼寺跡の調査は遅れがちであり、特に、塔跡等の確認された例は一例も見受けることができない。

日向國分尼寺跡に關しても例外ではない、ただ、大正12年、旧制妻中学校建設時等に、奈良・平安時代の布目文を含む多量の古代瓦が出土していることは、日向國分尼寺跡の包藏説を大きく喚起するに十分であったということができる。

聖陵会館建設用地は、この中間台地上の東方縁辺部であって、平成元年10月2日から、同

27日までの間に発掘調査を実施した。調査では、尼寺跡に関連した一部遺構でも検出されるのではないかと、大いに期待し意欲的に調査を実施した。

調査は、意外にも調査地が擾乱層・2次堆積土層で作業が困却し、遺構は南辺部に集中して土坑4基・溝状遺構7条・柱穴59個が検出された。

遺構については、伴出とする遺物も確定的ではなく、構築時代や使用目的も詳らかとしないが、埋土の状態等からして、一応中近世以降の遺構と考察される。

柱穴についても、柱穴とするに疑しきものが多く、これらを含めてもなお、建物の規模が確認できる配列は見るに至らなかった。

しかし、溝状遺構3号は、同台地の中央部から東方縁辺部にかけて直進し、北側壁は擾乱を受けるが、数点の布目瓦片が伴出していることから、古代寺院寺地の排水溝とも考察される余地が残されている。

出土遺物は、遺構と同様南辺部に集中し、表1に示すとおり僅少の305点が出土している。このうち縄文土器片6点、石器類3点は他所から、他の遺物も大半が流入遺物と考察される。

調査地周辺にはまた、西都原古墳群の数基が点在し、特に142号墳は、裾部が調査地に接し、関連遺物と考察される土師器・須恵器片を数点出土している。

しかし土器の大半は、時代を少し降った糸切り・ヘラ切り痕の底部を有する环片が主体であった。

瓦片は、古代時期の遺物として32点が出土している。器種は、前項で述べたとおり平瓦・半丸瓦の片であって、大半が布目文・縄目叩文の文様が主体をなしている。

また、陶磁器も小片として109点出土しているが、白磁・青磁片を残し、他はすべて近世以降の遺物と考察する。

以上のように、本調査では、意図した古代寺院の解明は程遠いものを感ぜざるを得なかつた。しかし流入遺物ではあれ、奈良・平安期のものと推定される布目瓦や、土師器等の土器とともに、古代寺院寺地の関連遺構と考察する余地を残した大溝の出土は、今後の調査を大きく期待するところとなるであろう。

また、諏訪遺跡の発掘調査に於いて、律令期の解明は果せなかつたが、奈良・平安時代、特に日向国分寺建立時代の究明、及び国分両寺跡の今後の調査資料として、大きく貢献するものと思われる。

図 版

追 四

我所知道的，是四年前，他和一个朋友，同在一家公司做事。他这个人，我印象中，是极好的。

他这个人，我印象中，是极好的。他这个人，我印象中，是极好的。他这个人，我印象中，是极好的。

他这个人，我印象中，是极好的。他这个人，我印象中，是极好的。他这个人，我印象中，是极好的。

他这个人，我印象中，是极好的。他这个人，我印象中，是极好的。他这个人，我印象中，是极好的。

他这个人，我印象中，是极好的。他这个人，我印象中，是极好的。他这个人，我印象中，是极好的。

他这个人，我印象中，是极好的。他这个人，我印象中，是极好的。他这个人，我印象中，是极好的。

他这个人，我印象中，是极好的。他这个人，我印象中，是极好的。他这个人，我印象中，是极好的。

他这个人，我印象中，是极好的。他这个人，我印象中，是极好的。他这个人，我印象中，是极好的。

他这个人，我印象中，是极好的。他这个人，我印象中，是极好的。他这个人，我印象中，是极好的。

他这个人，我印象中，是极好的。他这个人，我印象中，是极好的。他这个人，我印象中，是极好的。

図版1



調査地の遠景



調査地



コンクリートの残骸(1)



コンクリートの残骸(2)



遺構の検出状況



方形状土坑 1号等



溝状遺構 1号・2号



溝状遺構 3号

図版2



溝状造構 5号



溝状造構 6号



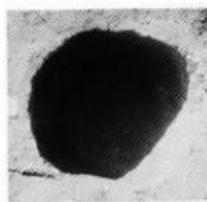
溝状造構 3号・6号の
切合部



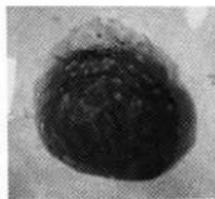
溝状造構 7号



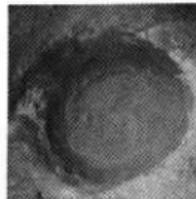
柱穴群



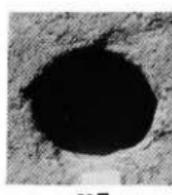
柱穴 6号



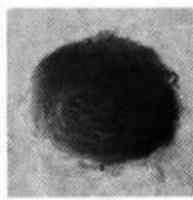
12号



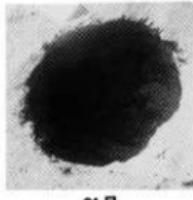
18号



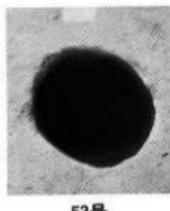
20号



26号



31号



53号

図版3



縄文土器 1～3



縄文土器 4～6



土師器 7～10



11～16



17～22



23～28



布痕土器 29～31



須恵器 32～34

図版 4



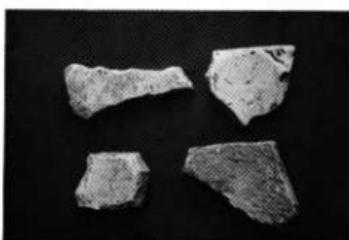
須恵器 35~40



41~43



瓦器 44



布目瓦 45~48



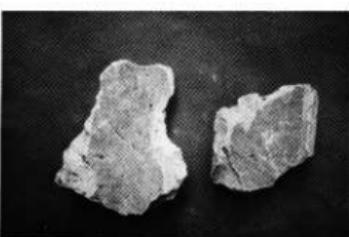
布目瓦 49~51



平瓦 52~54

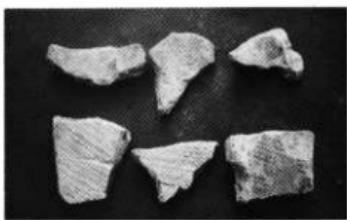


平瓦 55



半丸瓦(布目文) 56~57

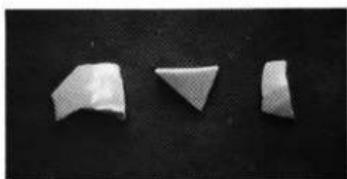
図版 5



半丸瓦 58~63



白 磁 64~68



青 磁 69~71



磁 器 72~76



染 付 77~80



染 付 81~84



染 付 85~89



陶 器 90~94

図版 6



陶 器 95~98



陶 器 99~101



陶 器 102~105



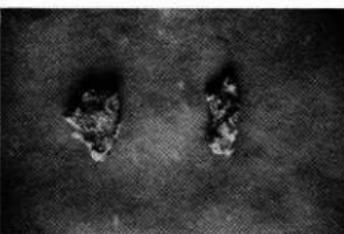
石 錘 107



石 斧 106



敲 石 108



鐵 片 109~110

西都市 埋蔵文化財発掘調査報告書 第12集

発行年月日 平成 2 年 7 月 20 日

編 集 西都原古墳研究所

発 行 西都市教育委員会

印 刷 イマイ印刷

